家族とくらし

9号

家族とくらし　9号　もくじ

photo	杉原　志保	2
こんな働き方応援したい 「喫茶れすと」を知っていますか？	安田　加奈子	4
おやじたちが腕まくりをはじめた 9	村上　信夫	11
そんなつもりじゃなかったんです 10	加納　かがり	14
ある日、わが子が学校に行けなくなった	岡島　奈央	18
未央のページ	大前　未央	24
コミュニティー・ビジネス探訪④ 地域情報発信は、お母さん達の作るホームページで	村上　誠	26
墨田区の３Ｍ運動と伝統工芸の世界	前田　象平 玉那覇　智江	36
一人ひとりの仕事が輝くように 福祉作業所「藍工房」	野田　陽子	42
広岡守穂の常住坐臥４	広岡　守穂	46
新連載		
地方政治を考える　～実効性の合る女性政策とは～	広岡　立美	50
新男性読本・考	杉原　志保	54
うたの手帖	木村　郁子	57
エッセイ		
U子三話	大野木　潤子	58
娘のことば	堀川　美紀子	61
私のボランティア	野崎　貴子	63
図書館から見えた 現代「親」事情	加藤　喜代子	66
寝りの風景	上川　ふみ	69
北里さんからのおたより ～阿蘇郡小国町より～	北里　加代	70
編集後記		72

Lukasamingaboka
勝☆平等の本

「男女平等って一体どういうこと？」そう子どもに問われたら、大人はどのように答えるだろう。一見簡単そうに見えるこの問題に答えるのは、実はかなり難しいように思う。

荒川さんらが出版した『男女平等の本』は、やさしい文章とイラストで“平等というものの持つ意味あい”を分かりやすく説明している。その例として、私たちが体験している家庭内での出来事をリアルに描いているからか、自分自身の問題としてひきつけて考えることができる。またグローバルな視点から、第三世界の女性問題などを取りあげ、世界の女性の連帯をも視野に入れている。この本には恩着せがましさがない。とても自然に平等というものの意味合いが描きだされている。

この本を使って授業を行なった高校の先生からの手紙に「知っているのと知らないのとでは後の人生が違う」と言った生徒がいたと書かれていたという。この本の原題にある“Likestillings”という語、すなわちLikestatasは、男女ともに自分自身の現状、そして他国の現状を知ることから始まる。

VOL.10

荒川　ユリ子さん

【「ノルウェー男女平等の本を出版する会」代表】

【申し込み方法】

セット数（８冊１セット（￥2,900））、氏名・住所・TELを明記の上、FAXまたは封書にて。支払いは到着後振込でお願いします。

［ノルウェー男女平等の本を出版する会］

〒182-0001東京都調布市緑ヶ丘1-10-27　FAX 03-3305-9346

写真・文／杉原志保

こんな働き方応援したい

「喫茶 れすと」を知っていますか？

安田　加奈子

「喫茶れすと」は、東京都多摩市の京王線永山駅から歩いて3分ほどの「ベルブ永山」の中にある。

「ベルブ永山」は、多摩市と民間企業との複合施設で1997年に作られた。

中には、公民館や図書館、消費生活センターの他、喫茶店やリサイクルショップなどが入っていて、周辺に住む人たちの憩いの場となっている。

「喫茶れすと」は、その「ベルブ永山」の3階にある。

窓側が一面ガラス張りになっていて、外の眺めも良く、ゆったりとした雰囲気は、はじめてここを訪れる私の心も和ませてくれた。

おいしいコーヒーが1杯200円、ケーキが120円からと値段も手頃なので、何度も足を運ぶ人は多い。

「喫茶れすと」のはじまり

北山文子さんは、この「喫茶れすと」の所長であると同時に「共同作業所れすと」の所長でもある。「喫茶れすと」で出しているクッキーやケーキなどは、おもにこの共同作業所で作られている。

北山さんは以前、行政書士として活躍していた。13年前友人の保健婦に「あなたも協同作業所を手伝ってみない？」と誘われて、気軽に応じたことが始まりだった。当時北山さんが手伝っていた作業所は日野市にあった。はじめは、手の空いているときだけ手伝っていたが、次第に共同作業所にも重点を置いて働くよう

になっていった。日野市の作業所で働く人の中には、多摩市から通っている人もいた。それを見ていた北山さんは、「多摩市に作業所があればわざわざ隣の市まで通わなくてもすむのに。多摩市に作業所がないのなら、私が作ってみよう」と思った。そして、病院のケースワーカーに代表になってもらい、市民ボランティアの人と共に「共同作業所れすと」を多摩市に誕生させた。

皆の集う憩いの場がここに

共同作業所は、障害を持つ人々の作業活動の場である。障害は、「身体障害」、「知的障害」、「精神障害」の3つに分けられるが、北山さんは、その中でも、もっともケアが遅れているといわれる精神障害者を対象とした共同作業所を作った。

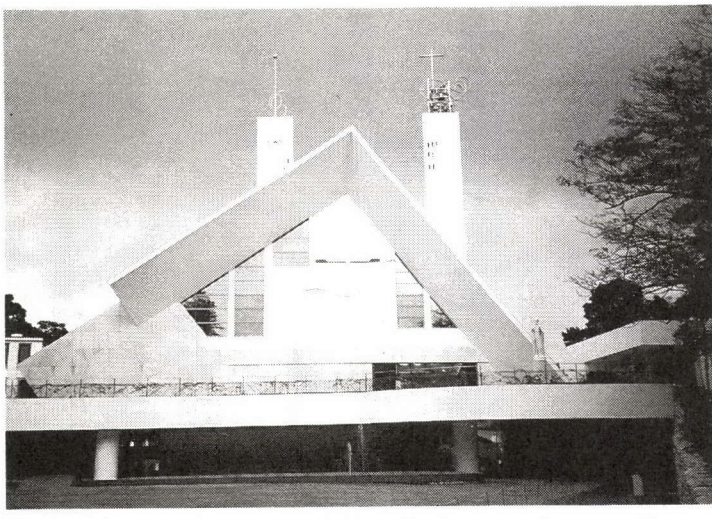
「れすと」は、共同作業所と喫茶部を併せると、現在7名の職員と15名のパートアルバイター、45名の障害者というメンバーで構成されている。

作業所の方は、多摩市和田にある。設立当時、作業所は小さなプレハブ小屋でしかなく、その8畳ほどのスペースの中でクッキー作りや手芸品作りが行われていた。トイレも1つしかなかった。

「機会を逃したら、次にいつトイレが空いているかわからない。したいわけじゃないけど今のうちにトイレに入っておこう。そういう風に皆が思い、トイレにたくさんの人が並んでしまうんですよ」

数年前に建て替えた今の作業所は、ロッジ風の木造の2階建てで日の光がよく入る、明るく、温かい感じのする建物である。

1階には、ケーキやクッキーを作るキッチン、手芸品を作る部屋、事務所があり、2階部分は下請け内職作業場と休憩所となっている。トイレ



多摩市永山の市と民間企業の複合施設「ベルブ永山」この建物の3階に「喫茶れすと」が入っている

も、1階と2階に2つずつ設置され、込み合う心配はなくなった。新しい作業所は、メンバーたちにとって働きやすい環境となっている。

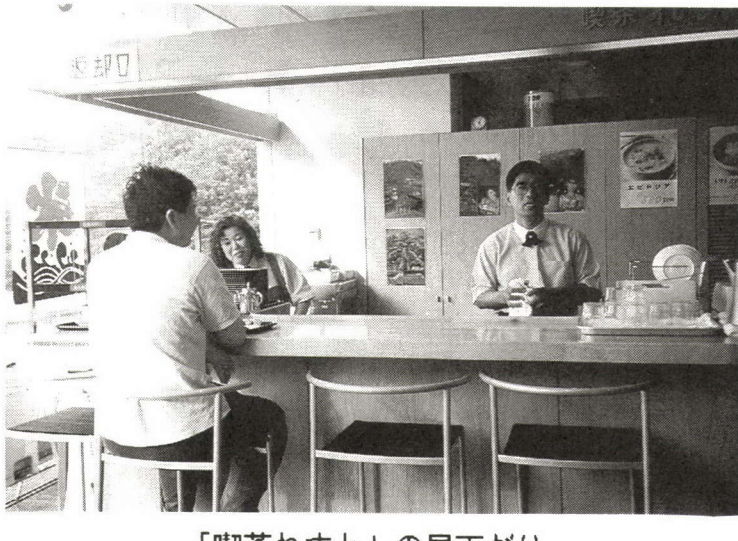
共同作業所の障害者メンバーの就業時間は9時45分から3時15分までと決まっているが、働く日数は、障害の重さ、本人のやる気などを考慮して人それぞれとなっている。だから、45人のメンバーが一同に介して作業をすることはない。普段は20名ほどのメンバーで作業をしている。作業をする以外に、スポーツをしたり、クリスマス会を開くなど行事もたくさんあり、作業所で働くメンバーの楽しみとなっている。

「作業所」から「喫茶」へ

北山さんたちが作業所を始めてから7年目。多摩市永山に市と民間の複合施設「ベルブ永山」が作られることになった。多摩市には聖蹟桜ヶ丘、多摩センターという2つの大きな駅がある。しかし、それらの主要駅ではなく、永山駅に施設ができたのは、聖蹟桜ヶ丘、多摩センターのような大きな町ではあるが住んでいる人が割合少ないところ、つまり人が出かけていくところではなく、人が生活をする場所、人が帰っていく場所に、市民のための施設を作ろう、という行政の動きがあったからである。

一過性の場所ではなく、市民が何度も足を運ぶ場所にしたい。そうして「ベルブ永山」が誕生した。その「ベルブ永山」に喫茶店コーナーができると聞いた北山さんはぜひやってみたいと思った。

多摩市には10ほどの小規模作業所があり、初めはそれらの作業所が合同でやろうという案が出ていた。しかし、経営の問題や、補助金の問題、そして身体、



「喫茶れすと」の昼下がり

知的、精神3つの障害者をまとめるのは難しいということから、喫茶店事業は「れすと」のみで運営されることとなった。

「喫茶れすと」が出来るまで、作業所で作られたクッキーなどは、市役所や病院、お祭りやイベントの会場で売られていた。それだけでは不安定な収入しか得ることができなかった。しかし、喫茶部門ができ、定期的に商品を卸すことが出来るようになったため、以前より安定した収入が得られるようになった。それどころか今は、喫茶部門とその他の外部からの注文が多すぎてまかないきれないほどだという。

ところで、「喫茶れすと」は障害者の人たちが作った商品を扱っているという看板は掲げていない。「お金を出して飲んだり食べたりする店なので、ひいき目で見てほしくない。そういう先入観から入るより、まず喫茶店に足を運んでケーキを食べてみて、それからどんな人が作っているんだろうと関心を持ってほしいのです」と北山さんは言う。

また、喫茶店ができたことで、仕事を終えた作業所のメンバーが立ち寄る場所ができたという。作業所での仕事は朝の9時45分から夕方の3時15分までで、一方の喫茶の方は、昼の11時から平日は夜8時まで、日、祝日は夜7時まで営業している。喫茶店へ行けば話し相手がいる。お客様だけでなく、作業所で働く障害者たちにとっても「喫茶れすと」は憩いの場なのだ。

差別と区別は違う

日本の社会では「障害者」というレッテルを貼られると、行政サービスを受けるメリットよりもはるかに大きなデメリットを受ける現実がある。中でも精神障害者は、医療や生活のあらゆる場面で差別を受けている。

まず、医療の面で、精神障害者が自分の住んでいる地域で安心して治療を受けられる態勢は不十分である。精神病院を作るのに、地元の人の反対にあうことがよくあるからだ。

東京には現在3つの精神福祉センターが存在している。これらを作る時も、自治体が精神障害者の社会復帰施設を快く迎える状況がほとんどなかった。

生活の面では、住む場所がなかなか確保できないことが挙げられる。契約するときに精神障害者だということを言えばまず貸してくれないし、それを黙って借りて障害者だと分かると追い出されるケー

スもある。また、保健所の相談員に保証人になるよう要求する家主も多い。

就職するのも難しい状況にある。障害者雇用促進法は、企業に対して一定の割合で障害者を雇用することを義務づけているが、この「障害者」の中に精神障害者は含まれていない。

また、精神障害者は、美容師、理容師、栄養士などになれないということが法律に明記されている。また、自動車の運転免許についても、精神障害者には免許を与えないことができるし、一旦与えても取り消すことができるという定めがある。このように、精神障害者に対する差別は根強く、彼らは病気のつらさ以外に多くの困難を強いられている。北山さんは、このような社会的なケアがあまりなされていない精神障害者のための作業所を作ろうと考えた。

共同作業所は、障害者の家族、保健婦、ソーシャルワーカーなどが、普段自分たちが接している障害者を働かせる場として作る家族会方式のものが多い。一方、北山さんたちの「れすと」は運営会方式といい、病院などの関係団体や市民グループが運営委員会をつくり、作業所の運営に当たっている。

「れすと」を、「彼ら精神障害者が市民感覚で生活できる場にしたい」と北山さんは言う。しかし、障害者を取り巻く、家族・作業所・保健所の間でそれぞれ役割が違う。障害を持っていたとしても、20歳を過ぎた人に家族がどれくらい関わるべきなのだろうか。また、家族が抱えている悩みを作業所の職員がどれ程分かってあげられるのだろうか。

保健所はというと、作業所にメンバーを紹介して安心してしまうことが多い。しかし、保健所は、障害者に作業所を紹介するだけにとどまらず、その後の経過を見守り、家族と作業所の間のコーディネーターとして関わっていく必要がある。家族・作業所・保健所、医療機関、それぞれが自分たちの役割を確認しあい、障害者を取り巻くネットワークを作っていくことが大事なのだ。

グループホーム瓜生のこと

北山さんは「れすと」の所長として活躍するかたわら、多摩市の「グループホーム瓜生（うりゅう）」の副代表としても活躍されている。グループホームとは、障害者が一つの住宅やアパートで共同生活を送るという制度だ。共同作業所が障害者に対する「昼のケア」だとすると、グループ

ホームはいわば「夜のケア」である。

それまで、障害者には「家庭か、施設か」という2つの選択肢しかなく、障害者が自立した生活を送ることが難しい状況にあった。しかし、1989年に知的障害者を対象に生活援助事業が制度化されたのを皮切りに、1992年に精神障害者地域援助事業が制度化された。国の基準では、障害者が生活をしていくのに必要なケアを行う「世話人」を配置することになっている。精神障害者を対象としたグループホームは、1995年の時点で220カ所にのぼるという。

グループホームの多くは1軒家を借りて、5～6人の障害者が共同生活をする形をとっている。一方、北山さんが副代表を務める「グループホーム瓜生」は、ワンルームマンションを6部屋借り、1部屋に一人ずつ住み、また同じマンションの中に3Kの部屋を借り、その部屋にはグループホームの誰もが自由に出入りできるようになっている。個人としての生活を尊重しつつ、お互いの交流の場も持てるようにとの配慮からこのような形をとっている。

偏見が生んだ誤解

このマンションを決めるとき、プールが付いているなど施設は整っているけれども駅から遠い物件と、多少建物は古いけれども駅から近い物件の二つの候補があった。その二つに絞るまでは、精神障害者が入居するというと「何をしでかすかわからない」と首を横に振る大家さんが多く、部屋を捜すのに難航したという。結局、建物は古いけれども駅から近い物件を選んだ。

「精神障害者の人たちは、雨が降った、風が強い、暑い、寒いなど気象条件で外に出たくない気持ちに拍車がかかってしまいがち。少しでも街に近い方が外に出ようと言う気持ちにもなるし、出やすくなるからこちらの物件にしました。それに、障害者だからと郊外に追いやるのではなく、私たちの生活の中に障害者がいること、それを自然に受け入れることが大切だと思うからここを選んだのです」

現在「グループホーム瓜生」では、専門学校など学校に通う学生と、作業所で働く障害者が生活している。食事はたいてい各々が自分の部屋でご飯を炊き、おかずは外で購入して食べているが、時々、世話人が料理を作り、皆で食べたりもする。

「『障害者は何をしでかすか分からない』と拒否する大家さ

んも多いと言ったけれど、彼らの方が他のマンションの住人よりもマナーがよく、挨拶もきちんとしてくれると、マンションの管理人さんの評判も上々なんですよ」

心の壁を乗り越える

喫茶部門へと「れすと」が拡張した1997年4月、北山さんは6名だった職員を増やすため、新たに10名の職員募集をした。40名近く応募してきたそのほとんどが、障害者と接する機会のなかった人たちだったという。北山さんはそんな応募者に、面接の他に「障害者と働く」「障害者と喫茶」などの作文を課題として出した。それは、障害者と働くのに「一緒に働いてやってる」「何かしてやってる」という気持ちではやっていけないからだ。

北山さんは「れすと」を障害者が市民感覚で生活できる場にしたいと考えている。より一般就労に近い就労形態を提供し、特別な存在としてではなく、働く仲間として接していきたいという思いからである。そのためにも「うちの子は病気なんだから」とつい過保護になってしまいがちな家族の意識、障害者を働かせてやっているという職員の意識、世間と自分を取り巻く環境に壁があることを認めてしまっている障害者自身の意識、障害者の作ったクッキーだから食べみよう、とか買ってみようというお客のボランティア意識、それぞれの意識を見直す必要がある。

「そうは言っても、まず障害者と場を共有することから始まります。とにかく一度『喫茶れすと』に足を運んでみてはいかがでしょうか」

（やすだ かなこ　フリーライター）

公民館や図書館、消費者生活センター等と共に
「喫茶れすと」は周辺住民の憩いの場となっている

おやじたちが腕まくりをはじめた9

～おやじたちの座標軸～

NHKアナウンサー
村上　信夫

仕事軸から生活軸へ

機は熟していた。準備講座で意識改革を成し遂げたおやじたちは、満を持していた。いつでも旗揚げをして街に飛び出す支度はできていた。

その覚悟を決定づけたのが、講座最終回の日本経済新聞の鹿嶋敬さんの話だった。鹿嶋さんは婦人家庭部の記者として男女の生き方の変化を追ってきた。岩波新書の『男の座標軸』の著者でもある。その中で、鹿嶋さんは、男が座標軸を変えて地域や家庭に目を向ける必要性を説いている。

男は、座標軸をどこに置くべきか。その置場所によってライフスタイルも大きく変わってくる。仕事軸と生活軸が直角に交差する座標軸のどのあたりに自分が位置づけられるか、見つめ返してみる必要がある。仕事中心の男の座標軸を、家庭や地域を中心とした生活軸の方向に振り動かす時代になっている。「性差」はいろんな場面でなくなってきている。「男は外、女は内」という伝統的な役割分業がすでに崩壊しているという認識がない限り、職場や家

庭で生じている軋みをキャッチして、解決することは難しい。

鹿嶋さんの熱弁を聞くおやじたちは、すでに仕事軸と生活軸のバランスを保っていた。鹿嶋さんが言うところの『複顔』（会社以外のいくつもの顔）を持ったおやじたちが、いっぱいいた。準備講座に集まったうち、28人が自主グループの旗揚げに参加することになった。

それぞれの座標軸

魅力的な顔ぶれがそろった。刀折れ矢尽きた人はひとりもいない。誰かが言った。「おやじの腕まくりで頑張れる人は、会社でも頑張っている」。その通りだと思った。地域は、会社の窓際にいる人が逃避する場所ではない。月曜から金曜は『会社人間』でいくのだ。土曜日曜だけ『社会人間』に変身すればいいのだ。

おやじたちは、それぞれ決意を新たにしていた。新たな「おやじ像」を模索していた。

☆子どもたちには兄貴のように接し、妻とは恋人のようにつき合い、いざというときは家族を護り家族から頼られる、頼もしく存在感の大きいおやじでありつづけたい。

（メンバーで一番の若手　Kさん）

☆リタイア後の人生を「生き返り」「再人生」という意味から「リライフの人生」と名付け、地域社会に役立つ生き方をしたい。

（定年を控えたOさん）

☆「会社＝赤ちょうちん＝郊外のマイホーム」をサラリーマンの夜のトライアングルという。この魔の三角地帯からの脱走を企てている一人として「会社＝地域＝家庭」のトライアングルを目指すおやじになりたい。

（これまで会社一筋だったSさん）

☆子どもに権威を振りかざす「親父」より、対等に張り合う「おやじ」でありたい。

（パソコンの第一人者　Tさん）

☆家の中に居場所はある。娘たちと話すネタはある。妻や娘たちとコンサートに行く。台所にもたつ。自分の好きなことができる時間を持っている。それが究極のおやじ。

（多趣味人Ｎさん）

☆わたしは「おやじ像」になりたくない！　義務や責任から解放されて、自分の本当の人生を作り出せる時期が来たのだ！　頭は柔らかく、意志は固く。目と耳と口と手足を最大限に使って。

（室内軽飛行機インドア　プレーンの権威Ｓさん）

☆「おじさんってけっこう面白いね」子どもたちの間で評判のおやじになりたい。

「ご主人地区センターの常連ですって」。井戸端会議で評判のおやじになりたい。

「生き生きしている姿に惚れなおしたワ」。女房に評判のおやじになりたい。

（これ　わたし）

わずか半年前は一面識もなかった男たちが、意気投合して語り合っている。その姿をみていると、「この指とまれ」と言った張本人の私も不思議な気がしてくる。

ずいぶん前からの幼友だちだったような気がしてくる。姿形は大人でも、話し込んでいるうちに純情な子ども心がよみがえってくる。

みんなで今後の行動計画を話し合い、遊び心のある会則を考えた。グループ名もそのまま「おやじの腕まくり」とすることにした。腕まくりしたおやじをデザインしたロゴマーク入りのそろいのトレーナーも作った。「おやじの腕まくり」は、まさに地域社会への人材派遣業とも言えた。腕をまくって派遣要請を待つばかりとなった。

（むらかみ　のぶお　ＮＨＫアナウンサー）

村上信夫さんの本が出ました

『元気の出てくることばたち』

近代文藝社　１５００円 税別

なにげないことばが人を元気づけ、勇気づけます！
率直な飾り気のないことばほど、その力は大きいものです！
この本には、元気のわいてくることばがいっぱいです！

筆者が「ＮＨＫニュースおはよう日本」などでインタビューした人たち。水上勉、沢村貞子、杉村春子、吉永小百合、瀬戸内寂聴、平山郁夫、ヨーヨー・マ、さだまさし、石井竜也、谷川浩司、山本容子、日比野克彦・・・

エピソードを交えて、あわせて50のとっておきのことばをご紹介します。お問合せは左記へどうぞ。

近代文藝社　東京都文京区目白台2－13－2
ＴＥＬ03－3942－0869

そんなつもりじゃなかったんです……。VOL.10

報道と脳死移植と医者と体温と本について

加納かがり

このあいだ、日本で二例目の脳死移植が行われたそうである。（あるいはもしかしたら、この原稿の載る雑誌ができあがる頃には、もっと増えているかもしれないけれど）。新聞によれば、この二例目の提供者となった男性は、あの大騒ぎとなった一例目の高知の脳死移植がきっかけで、ドナーカードを持つようになったそうである。なるほど、人それぞれである。私はあの事件で、どちらかと言えば、ますます脳死移植について、否定的な気分を持ってしまった一人だからである。

私はあの、一例目の報道のさい、気持ちが悪くてしかたなかった。脳死？臓器提供？でも、呼吸をしているんでしょ。体温だってあるんでしょ。それをあばいちゃうわけ？

で、提供者の死亡時刻はいつになるの？

……ううう、気がとおくなりそう。

この死亡時刻はいつになるのだ？ という疑問がけっこうこたえた。いや疑問なんかじゃないな。聞かなくても答えはわかっている。それは医師団が決めるわけだ、事実上。どう考えても。しかし、そんなこと考えたくない。

だいたい私は、病院ならびに医師たちというものをあんまり信用していない。というか好きじゃない。だから、そんなもんに命をあずけられるか、という気持ちがまずどこかにある。

なんで嫌いかといえば、おかしな医師が多すぎるからである。受験競争の激化による弊害で、適性に問題がある医師が増えた、と世間でよく言われるけれど、ほんとは私としては、そんな怖いこと、信じたくない。それは、やっかみによる偏見のたぐいだと思いたい。けれどやはり、（やっぱり変だよね）と思ってしまうような医師たちに、私は、実にしばしば、遭遇してしまう。個人病院で。あるいは総合病院で。大学病院で。ここは病院ではなく、「受験偏差値が異常に高くて、社会適応ができなくなった人たちの収容施設」と言った方が正しいのではないか、と思うこともある。そういえば最近の医者は、四文字熟語に妙に強いと聞いたことがある。それもなんか、恐怖話めいて聞こえる。……そんな医師たちが、神さまの代役をつとめるわけ？

しかし、彼らは言うかもしれない。脳死なんです。提供者は、もう、なくなっているのです。

体温があるのに。

私は、体温が好きである。呼吸や心臓の音も好きである。だから私は、そのように動いて

いるからだを、死んでいるとは認められない。脳死は脳死であって、人の死だとは思わない。そしてまた、努力してまで、その状態を死なのだと思う必要もないと思っている。

けれど、それでは移植手術に絶対反対かというと、そうでもない。提供者本人や家族の意思がはっきりしているなら、それを邪魔することはできないと思う。それになんといったって、それによって人の命が助かるわけなのだから。

脳死移植も、死んだからではなく、「死にゆくからだ」を、強固な意思によって提供するのだ、と私は解釈している。

『記憶する心臓』（クレア・シルヴィア著／角川書店）という本がある。アメリカの心肺同時移植患者の手記で、なかなか印象的な本である。著者は手術当時四八歳の女性でダンスの教師。臓器提供者は、オートバイ事故でなくなった十八歳の青年である。

「心臓などの臓器を移植すると、ドナーの性格や好みの一部が、移植患者に移ってしまうことがある」と、この本に書いてあると聞き、少しきわもの的な興味もあって、読んでみたのだけれど、実際に読んでみると、私はそれよりも、移植患者が悩み苦しみ、快復していく様子のほうに、より多くの興味をもった。

私は、脳死移植に反対する立場から書かれた新聞の署名記事で、「臓器を部品のように扱う」と表現しているものを読んだことがあるけれど、それは少なくとも、この本の著者にはあてはまらない。彼女は、移植された臓器とその提供者に対して、実に多くの思いをいだくのである。

移植臓器は慢性的に不足していて、ドナーが見つかった患者はとても幸運であるといえるわけだが、現実には、移植患者は、そんなに簡単に「ラッキー」だなどと思わないようである。人の突然の死によって生きながらえたことに、罪悪感を感じ、ひどく落ち込んでしまうこともある。もちろん、ドナーの死に彼らは何の責任もないわけだが、だからと言って平気でいられるというものでもないようだ。

快復期にあった彼女は、あるとき青年の夢をみる。夢のなかで青年と親しくなってゆく。そして、夢の彼は、ドナーの〈彼〉に違いないと確信するのである。

彼女の食べ物の好みが変わる。嫌いだったビールが飲みたくてたまらなくなり、食べられなかったピーマンが好物になる。それから、金髪の女性に、ふっとこころをひかれたりする。

そして彼女は、（これは、〈彼〉の好みなのに違いない）と思いいたるわけである。そして実際、それが事実であることが後に判明するわけだが、それらのできごとを、彼女は実に前向きに受け入れていく。自分はドナーとともに生きているんだと思い、もう孤独ではないと思うところ、かつて娘を妊娠していたときのことを思いだし、（あの感覚に似ている）と思うあたりは、臓器移植にけっこう批判的な考えを持っていた私でさえ、とても感動を受けた。

そんなわけで、臓器移植に賛成の人、反対の人、ドナーカードに記入しようかと迷っている人、ぜひ読んでみたらいかが、と思います。

少なくとも、わあわあ言っているマスコミの報道よりも、より多くのことがわかるような気がします。

（かのうかがり）

ある日、わが子が学校に行けなくなった

岡島　奈央

美香ちゃんのこと

美香ちゃんは1989年4月1日に生まれた。両親と2才年下の弟との4人家族。美香ちゃんは、早くから歩き、大人の言うことも早くから理解でき、周りからもしっかりした活発な子どもと思われていた。幼稚園にも2才から通った。少人数の小さな幼稚園だったため、途中から大きな幼稚園に移った。周囲と馴染むのに少し手間取ったが、友だちもできて楽しい幼稚園生活を送った。

1995年4月、美香ちゃんは家から5分もかからない小学校に入学した。母親の洋子さんには、少し不安があった。それは、美香ちゃんが早生まれだということ。あと1日遅ければ次の学年になっていた。洋子さんは、その不安を最初の保護者懇談会で担任にはっきり伝えた。「早生まれなので、少し気を付けて見てやって下さい」と。

はじまり

それは、突然やってきた。いや、じわじわとだったのかもしれない。2学期の終わり、美香ちゃんは風邪を引いて1週間学校を休んでしまった。そうして、そのまま冬休みに入ってしまった。3学期が始まって1週間だけ登校して、美香ちゃんは学校に行けなくなってしまった。原因ははっきりしない。いじめが原因でもなかった。洋子さんは当時を振り返る、「原因は美香自身も分からなかったのでしょう。分かったとしても、それを言い表せる力が小学1年生では無かったのでし

ょう」と。

学校と先生

美香ちゃんが学校に行かなくなった当初、洋子さんは別段あわてなかった。少し休ませてあげたら、また行くようになると思っていたのだ。後になって考えてみると、その頃の洋子さんは学校信仰の中にいたのだと言う。空気みたいに意識していないが、学校に行くことは当然のことと思っていた。だから、口で「学校を休んでもいいよ。」と言っていても「学校へ行ってよね！」という無言のサインが出ていた。

学校を休むようになってから、担任がコンタクトをとって来た。美香ちゃんの担任は、美香ちゃんの住むB市唯一の市立幼稚園から小学校に上がってきたばかりの教諭だった。先生自身も母親であるし、ちょっと前まで幼稚園児だった1年生にとって最適な、子どもの気持ちが分かる先生だろうと、父母も期待をしていた。しかし、B市の市立幼稚園は、子どもたちにとって大切な幼児期の保育を行う場所というより、いかに上手く小学校生活を送れる子どもを作るかということに重点を置いた、プレ小学校だった。この教師も実際は経験不足で、ゆとりがなく、学歴主義の先生だった。

ある時、こういうことがあった。美香ちゃんが持って帰ってくる連絡帳のすみに、いつも教師の字で番号が書いてある。何の番号だろうと思い教師に尋ねると、連絡帳を書いた順番だという答えが返ってきた。1年生の初め、まだ字を覚えて間もない頃だった。早い＝（イコール）いいことということを子どもたちに押しつけているようで、洋子さんは首を傾げた。

ある日、授業中に一人の生徒が手を挙げて教師にこう言った。「先生、おしっこ。トイレに行っていいですか」すると、教師は休み時間に行かなかったのが悪いのだからとトイレに行かせなかった。その生徒は、がまんできずに漏らしてしまった。教師は、見せしめのように、その生徒に雑巾で汚れた場所を拭かせた。

また、別の日、美香ちゃんの教室の隣にある1年生のトイレで、誰かがトイレットペーパーを散乱させる事件があった。教師は自分のクラスのある生徒を犯人と決めつけ、「あんたでしょ！」と、胸ぐらをつかん

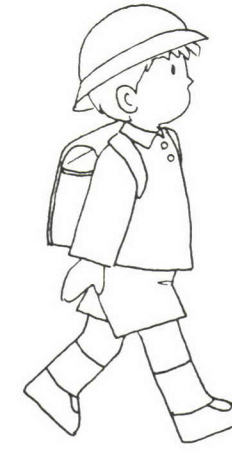
だ。

この教師に問題があることは明白である。事実、翌年この教師は担任をはずされている。しかし、この光景を見ていた子どもたちに与えられた影響は、この先も消えずに残るのではないだろうか。そして、美香ちゃんにとってはどうだったのであろうか。

話し合いを続けていた洋子さんも、この教師に信頼が持てなかった。いくら心を割って話しても、親身な気持ちが伝わってこなかったのだ。つのる不信感。そして、あるとき洋子さんが「授業で、先生が話されていることを、美香が理解していないようなんです」と言ったところ、「私の授業が分からないのなら、教師を変えるしかないですね」という答えが返ってきた。その突き放したような言葉を聞いた時「だめだ！」と思ったのが、教師と話し合いを持った最後だった。

誰に相談すればいいのか

洋子さんは、市の教育相談にも電話をした。応対した相談員は、退職した元教師だった。「弟さんにお母さんの愛情が向いているからでしょう。お姉さんの方にも、もっと愛情を注いであげて下さい」という、通り一遍の答えだった。対応も良くなかったため、出向くことはなかった。次に、県の児童相談所に行った。そこでは、洋子さんが相談員に話をする間、美香ちゃんは別室でお姉さん職員と遊び、その遊びを通して原因を探っていこうという方法を採っていた。しかし、子どもが問題児だから学校へ行けるように治療しようという態度で、洋子さんには納得がいかなかった。



1年生も終わりに近づいていた。美香ちゃんは、たまに気が向くとお母さんと一緒に給食を食べに学校に行った。しかし、授業には参加できなかった。次第に、洋子さんをあせりと不安が襲ってきた。その頃、美香ちゃんは、赤ちゃん返りをしたようにお母さんにベッタリ引っ付くようになってきた。自分の要求が通らないと癇癪を起こした。洋子さんは「今まで愛情が足りなかったので、赤ちゃんに返って甘えているんだ」と

考え、全てを受けとめようとした。しかし、それは大変な作業だった。洋子さんにも次第にストレスが溜まっていった。そして、「これは、美香が学校に行くようになれば解決する問題ではないのではないか」と、考えるようになった。

苦しみ、もがいている母娘に対して、父親はどういう態度をとっていたのであろうか。父親は、もっと簡単に考えていた。美香ちゃんのわがままで学校に行っていないのだから、きつく叱っておしりをたたけば学校に行けると思っていた。だから、腫れ物に触るような洋子さんの態度は、生温いように感じていた。しばしば、夫婦間で衝突があった。次第に夫婦の溝が深まっていった。

2年生になって、美香ちゃんのクラスの担任が替わった。これは異例のことだった。新しい担任は、家を訪れたり美香ちゃんを公園に誘ったり、積極的に接してくれた。美香ちゃんは、とても楽しそうだったが、やはり授業には参加できなかった。

親と子の問題

美香ちゃんの不登校が、思っていた以上に深いところに原因があるのではないかと気づいた洋子さんは、自分を責め始めた。育て方が悪かったからか、家庭環境に問題があったのか、夫婦間に問題があるからなのか。洋子さんは、自分自身を責め続けた。救いを求めて、元教師で「賢治の学校」の主催者である鳥山敏子さんのワークショップを美香ちゃんと一緒に受けることになった。それを通して、自分と子どもの問題は、自分と自分の親との問題なのだと思うようになった。自分がどう育てられたかは、自分がどう育てるかにつながってくるということなのだ。ここから洋子さんは、今まで気づかなかった自分と両親との問題に直面することになった。

自分自身の問題

2年前の夏休み、フリースクールの東京シューレの「不登校を考える親の会」主催の合宿に参加した。そこで、今まで美香ちゃんに対して、「学校を休んでもいいけど、いつかは行こうね」と思っていた自分、学校信仰の中にいた自分に気が付いた。そして、学校に行かない子でもいいんだと、本

当に思えた。その時、気持ちがストーンと下りた。そして、洋子さんは、学校に行かないで家で育てる決心をした。子どもを丸ごと受け入れてやる事の必要性も学んだ。それはまた、自分自身を丸ごと受け入れることでもあった。それができなければ、子どもを丸ごと受け入れられるはずがないのだ。しかし、ここで洋子さんは自分を受けとめられない自分に突き当たってしまった。自己肯定出来ない自分に気づいたのだ。そして、美香ちゃんの不登校の問題は、今度は自分自身の問題として向かってきた。ここから、洋子さんの自分探しの旅が始まった。

現在、洋子さんは、依存症やアダルト・チルドレンの研究の第一人者で精神科医の斎藤学氏が所長を務める、家族機能研究所で月1回のカウンセリングを受けている。また、ここのセルフヘルプ・グループに週2回参加している。セルフヘルプ・グループ（自助グループ）とは、同じ悩みを持つ人たちが話をすることで、自分自身で問題に気づき、お互いの悩みを共有する集団である。

洋子さんが、美香ちゃんの不登校の問題は自分自身の問題と思い始めた頃、夫婦間の溝は、修復できないところまで行っていた。夫の暴力で子どもを連れて家を出たこともあった。離婚を真剣に考えたこともあった。しかし、それを思いとどまらせたのは美香ちゃんだった。洋子さんが実家に帰ろうとしたとき、あれほどお母さんにベッタリくっついていた美香ちゃんが、自分はお父さんの元に残ると言ったのだ。その後、極度のストレスから洋子さんは病に倒れた。この頃から夫は、歩み寄りを見せるようになった。夫もカウンセリングに通ったこともあった。美香ちゃんを「学校に行かずに家で育てる」ということも理解し、協力してくれるようになった。洋子さんは今では、美香ちゃん自身が「家で育つ」を選んだと思えるようになった。そして、美香ちゃんが「お母さん、世間の物差しでなく、自分の物差しを持って、お母さん自身を生きてよ」と教えてくれたような気がしている。

これから

しかし、これで終わりではない。不安はいつもある。先が見えず、今しか見えな

い不安。学校に行っている子と不登校の子を乗り物にたとえると、学校に行っている子は新幹線に乗っているようなものだという。乗るのは大変だけど乗っていれば博多まで行ける。不登校の子は鈍行に乗ったり、バスに乗ったりと直通のない旅。自分で考え、見つけ、遠回りしたり、迷ったりしながら目的地まで向かう。不登校になってしまった子どもは、社会的に弱い存在である。周りから、学校に行けないダメな子という偏見の目で見られ、子ども自身も学校に行けない自分は、ダメな子なんだと思ってしまう。後になって考えると、美香ちゃんの赤ちゃん返りのように見えた行動は、自分はダメな子なのではないかという不安を、一生懸命母親にぶつけていたものだったのだろう。

美香ちゃんは今、ピアノ教室や絵画教室に通い、月2回大学院生のお姉さんに来てもらって、一緒に勉強をしたり、話をしたりしている。洋子さんは、常に美香ちゃんに寄り添った生活を志している。少し前、美香ちゃんが人と関わりを持ちたいと言っていた頃、不登校の子たちを集めてサークルを作った。しかし、子どもたちの状況が色々変わり、現在は休会中。今年の夏には、知らない子たちの中、美香ちゃん一人で沖縄へ旅行した。そして、御蔵島では家族でイルカと一緒に泳いだ。最近、洋子さんは美香ちゃんと一緒に山村留学もいいかもしれないと考えている。敷かれたレールの無い旅は、自由な発想と選択肢を洋子さん美香ちゃん親子にもたらしたように思える。

今や不登校児童は10万5千人に上る。もはや不登校児童の問題は、特別な子どもの問題ではなく、誰にでも起こりうる問題なのだ。もしかしたら明日、わが子が学校へ行けなくなるかもしれない。こういう事態になっていても、行政の対応は遥かに遅れている。不登校の原因は一人一人違い、不登校の問題のとらえ方も人によって全然違う。だから、サークルを作って、一つにまとめて扱うことも非常に難しいのだ。子どもたちをサポートする機関も情報も非常に少ない。これからは、不登校児童をサポートする機関の充実と共にネットワーク作りも必要だと考える。

（おかじまなお　フリーライター）

ノストラダムスの大予言

ちょうど、私が小学生の頃、香港から日本に帰国して、新しい小学校へ転入してきた頃のことだったと思います。ユリゲラーがスプーンを曲げたり、超能力だとか「ノストラダムスの大予言」だとか、その手のオカルト的な話題が大ブレイクしていました。

当時、今以上に想像力の豊かだった私は、当然のごとく本気で、ユリゲラーもノストラダムスの「この世の終わりの大予言」も信じてしまいました。…1999年っていったら、私は何歳になっているんだろう?ええっと、そうか27歳か。ひゃー、短い人生だなぁ。やばい。そうと決まったら、ぼんやりしてなんかいられないじゃない!…これはいつしか私の中で「強迫観念」となり、恐ろしいくらいに私のココロにこびりついて、「トラウマ」のようになっていったのです。それからというもの、とにかく人生は27歳で終わってしまう（かもしれない）という潜在意識が常に働いてしまい、とりあえず「やってやれないことはない」というか、「ケ・セラ・セラ」というか、私がそういう風に考えてしまうようになったのは、まちがいなくこの「トラウマ」のせいです。

小学校6年生の始め頃、帰国子女だった私は新しい学校に馴染めず、いわゆる「いじめ」を経験しました。「いじめられる側（私）」にも「いじめられる」だけの理由があったのだと思いますが、それにしても子供ゴコロに「理不尽さ」を感じながらの、ひどく辛い毎日でした。今まで生きてきた中で、あの時ほどの精神的苦痛を味わった時期はありません。でも、小学生の頃の私の「想像力」は、本気でノストラダムスを信じていたので、「どうせ27歳になったら死んじゃうんだから、どんなことがあってもそれまでは我慢しよう。今、がんばればきっとそのうちいいことがある。」って、言い聞かせて乗り越えちゃったのです。今となっては、ちょっと笑ってしまうような話ですが。でも、それだけ、子供の頃の「想像力」は純粋で強いチカラを持っているということなのです。

でも「いじめられたこと」について、さすがに小学生の頃の私も納得できなかったのだと思います。そこで、私がとった「小さな抵抗」が左ページの卒業文集の作文です。私は、自分の思っていることや感じていることを、「表現する（＝自分を解放する）」喜びみたいなものをこの時初めて知りました。

そして、卒業文集に書いた私の詩は、もうひとつの「トラウマ」として、今でも私のココロにいつも在ります。…ともだちを大切にできる人になりたい…

そう考えると、謎めいたちんぷんかんぷんの「詩」を残してくれたノストラダムスや、その彼の詩を「この世の終わりの大予言」と解釈してくれた研究者達のその計り知れない「想像力」に、私は感謝しなくてはなりません。おかげで私の人生は、（まあ、たかがしれてますけど）それなりに充実したものでしたし、大げさな言い方かもしれませんが、彼らのおかげで「今の私」があるっていってもいいくらいなんですから。

で、何時の間にかその27歳になってしまっている私は、もちろん今は「大予言」は信じていませんが、ノストラダムスにせよ、小学生の頃の私にせよ、やっぱり「想像力」って大事ですね。ノストラダムスの大予言、バンザイ!

でも
イジメは
よくないコト
なのですから…。

ともだち

六年二組　大前　未央

私は、今までいろいろな友達と出会って来ました。しかも、私が出会った友達は、みな良い友達ばかりでした。それは、私にとって、好きだという人もいれば、嫌いだなという人もいました。けれどもそんな嫌いな友達でさえ　私のために　いつもつくしてくれています。

それなのに私はと言えば、反対に迷惑ばかりかけてしまったり、悪口を言ったりで人を困らせてばかりなのです。それでも、友達は、何一ついやな顔は、しないで、いてくれるのです。

私がこの学校に来た時もみんなが、仲良くしてくれたり、親切にしてくれたりしてくれました。

でも、私の方は、今まで　友達に良い印象をあたえてきたのでしょうか。

そういえば、10月の末ごろ、友達に

「大前さん　最近態度が悪いよ。」と、注意されたことが、ありました。他の人にも注意されました。

私は　その時、心の中で　その言葉に、"何言ってんのさ"としか考えませんでしたが、後になって　友達って私を直してくれる小さな先生じゃないかと思えてきました。

私は、それ以来、友達からの注意をよく頭に入れて行動するようにしています。もっとも、時々悪口とかが飛び出してしまうのですが

でも後になって

（あーあ。あの時　なんであんな事を言っちゃったんだろう。私ってバカだなあ。）と後悔してしまいます。

こんな素直な気持ちになれるのは、みんな友達のおかげだといつも思っています。

友達が注意してくれなかったら、今ごろ私は、悪いことばかりしてきらわれていることでしょう。

本当に友達っていいものです。

今の私には、たくさんの友達がいます。

友達は、私の大切な宝物です。

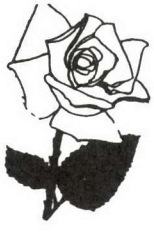
この宝物は、一生こわしたりいいかげんにあつかってはいけない大事な物です。

だから、私は、この宝物をもっともっとキラリと輝くダイヤモンドのようにしたいと思います。そして、今以上に友達をふやして仲良くしていこうと思います。

これからいろいろな友達と出会っていくけど、その中で友達を大切にするこの心は、いつまでも大切に育てていこうと思います。

ともだちの「と」は、とても大切の「と」
ともだちの「も」は、もっとたくさんの「も」
ともだちの「だ」は、だんだんふやそうのだ
そしてともだちの「ち」は、小さな私を大きくして
してくれるの「ち」

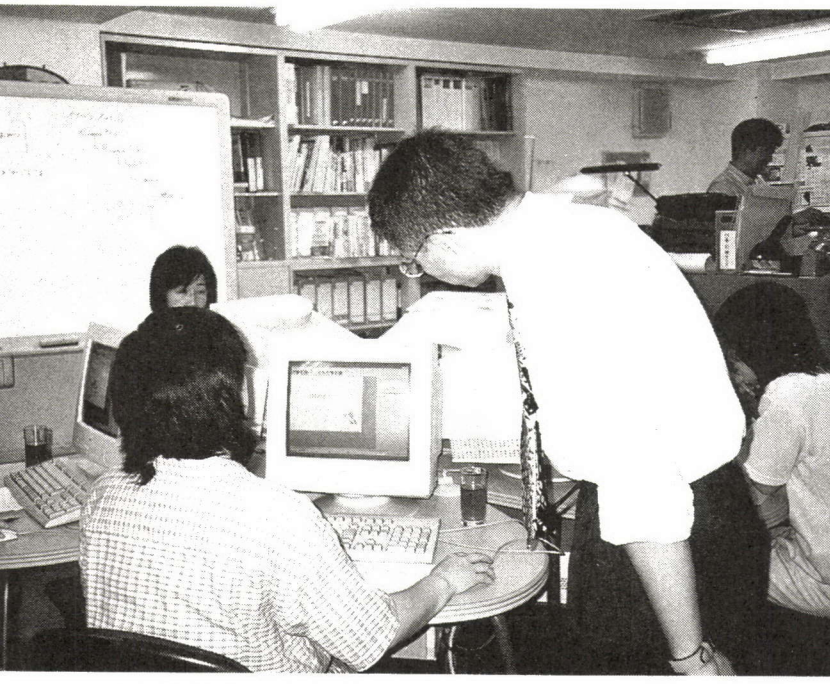
私は、いつもこうおもっています。



コミュニティ・ビジネス探訪④

地域情報発信は、お母さんたちの作るホームページで

SFM（ソーホー・フォー・マザーズ）



共同作業中の仕事場の光景／個人で作業をする場合もあれば、同じ空間で仕事をすることもある

text by 村上　誠

先端技術と地域と生きがいと

新しいビジネスが地域を変える。地域を基点としたビジネス。それはすなわち、コミュニティ・ビジネスだ。それは、新しい生き方、働き方を生み出す。そんな事例をレポートする。

下町から世界に発信

両国。東京国技館所在地として知られるこの街は、今なお雑多な町並みを残す数少ない下町でもある。不思議と軒を並べるそば屋で腹ごしらえをし、近くの喫茶店に入る。窮屈そうに肩を寄せ合い、なにやら仲間内の話題に盛り上がる未来の関取たちに囲まれて、薄いコーヒーをすすれば、時間の流れがゆったりとしてくるのを感じる。

両国とは、そんな街である。

ＪＲ両国駅から徒歩数分のところに、ありふれたとあるビルが建っている。特筆すべきことは何もないが、あえて

言えば、一風変わった木製の看板が目につくくらいであろうか。

その日も、いつものように、その何の変哲もないビルの一室にお母さんたちの明るい話し声と、歓声が響いていた。

「この画像をどうやって動かせばいいの？」

「クリックしてドラッグすればいいんじゃない？」

「やってみたけどできないの」

「あ、それはね、新しく<表>の範囲設定をして、取り込めばいいのよ」

「……できた！　ホントだわ」

「へー、そうやればよかったんだ」

「簡単でしょ」

しばらくの沈黙の後、また別の誰かが声を上げる。

「スクリーン上にロゴ（画像データ）を重ねるとまわりが白いままなんだけど、どうやればいいのかなあ」

「えーと、どれどれ。あ、これね。それは透明化しなきゃいけないのよ」

「透明化ってどうやるの？」

「画像処理のウインドウを開いて、透明化処理を選んで、画像を指定するとできるよ」

「へー、できたできた」

と、ここまでの会話を聞いたかぎりでは、彼女たちが何をしているのかさっぱり分からない。彼女たちは、ＳＦＭ（ソーホー・フォー・マザーズ）というパソコン講習プログラムを受講した女性たちで、地域企業や、地域情報誌のホームページの作成を請け負って作成しているお母さんたちのグループなのである。

新しい労働のあり方としてＳＯＨＯ（ソーホー＝スモールオフィス・ホームオフィス）という働き方が認知されるようになって久しい。個人事務所のような小さなスペースや自宅で、データベースの作成をはじめ、個人所有のパソコンの機能を生かしてできる仕事をする小規模個人事業者（いわゆる在宅ワーカーも含む）がそれである。

アメリカでは約四二〇〇万人いるといわれているＳＯＨＯだが、日本では、明らかに、アメリカ型とは違う形で発展しているが、さらに大きく分けて二つのＳＯＨＯがある。

ひとつは、独立した事業として立ち上がっているものや、企業のアウトソーシングの結果、サテライト（衛星）オフィスとして企業の機能を補完しているもの。これらは、明らかに既存のビジネスの流れを汲むもので、時代の要請で結果的にＳＯＨＯという形態になっているというタイプ。

日本でＳＯＨＯのための協同組合「ＳＯＨＯギルド」を

一九九七年に立ちあげた河西保夫によれば、九八年時で約一四〇団体、二〇万人が加入しているというから、一般の認識以上に広がりを見せているのが実情だ。

もうひとつのＳＯＨＯが、生活の手段というより、むしろ社会的なやりがいを求めて、パソコンを使った在宅ワークを行う主婦の層である。こうした女性をターゲットに翻訳やマーケティング調査、情報誌の取材などの仕事を紹介したり斡旋したりするサービスを提供するところも出始めているが、まだまだ少数である。基本的には、かつての内職がテクノロジー化したようなもので、前者に比べ「仕事」として成り立たせることが非常に難しい。

ところで、読者の方で覚えておられる方もいるかもしれないが、以前、この連載の中で「キャリア・マム」というグループを紹介したことがあった。あのグループなどがまさに潜在的なエネルギーを持つ女性たちに仕事を斡旋する最たる例である。

話を戻そう。それではなぜ、この後者が「仕事」として成り立つのが困難なのか。

この問題にこそ、実は、ＳＦＭが生まれた理由があり、かつ、その試みの背後には、本当の意味で新しい働き方を作ろうという意図が隠されているのである。

成功の陰に隠された秘訣

「こうしたＳＯＨＯのいちばんの問題は、初動期にあるんです」

このＳＦＭを立ちあげた㈲すみだリバーサイドネット（以下、ＳＲＮ）の代表取締役社長で、墨田区で居酒屋を経営している竹村行正は言う。彼は、地域の中小企業経営者らと共に異業種交流グループを結成し、そのグループの中から生まれた「ネットワーク研究会」をベースとして、一九九六年十月にこのＳＲＮを設立した。

墨田区は、職住近接の割合が高く、都内においても中小企業の多いまちである。不況の波をまともに受け、その影響が大きいのもこうしたまちの特徴である。商店街はシャッター街へと姿を変え、一軒、また一軒と古くからの顔なじみが営む店がたたまれていく。子供が減っていく。街が死んでいく。

ＳＲＮは、地域社会の中で事業を手掛ける中で、「地域の元気づくり」こそが、経済に限らず、地域全体の活性化にがるのだという問題意識から、「地域振興」をテーマに活動している。その業務内容として

は、パソコンやインターネットのセットアップやサポートに始まり、プロバイダー業務、ホームページの作成、異業種交流フォーラムへの支援などがある。こうした仕事を通して、地盤沈下が続く下町の情報ネットワークの形成、相互扶助、地域に眠ったり埋もれている人材や資源を再発見していこうとしているのである。

それが、どのようにしてお母さんたちに技能を習得させ、ホームページ作成を仕事として受け持ってもらうことにつながるのか。これには竹村なりの時代の流れの読みと計算が働いていた。

なぜ地域は衰退するのか

一九九六年にSRNを立ちあげて以来、竹村の中では、あるひとつのプロジェクトを実現させたいという思いが日に日に膨らんでいっていた。それは、地域の情報ネットワークを作るうえでも欠かせないものとなるはずだった。

「人が集まることによって交流が生まれる。情報だの、ネットワークだのと言ったところで、結局は<人>に行き着かざるを得ない。だったら、その中心点となる場所があったらいい」

その着想は、一九九八年三月に「ネットワークサロン」の開設という形で結実する。

そして、同時に心強い仲間も得た。CBN（コミュニティ・ビジネス・ネットワーク）の細内信孝だ。このネットワークサロンは、CBNとの共同事務所という形をとっている。

中小企業経営者としての危機感から、<地域全体をあらゆる意味で「元気」にすることなしに地盤沈下する自分たちのまちの活性化も、自分たち企業経営者の先もない>と考える竹村と、研究者として<今のままの日本のビジネスのあり方、地域社会のあり方では、この国はそこで暮らす人々の人間性を無視した空虚な国になってしまう。そうならないためにも地域に新しい雇用を生んだり、地域に貨幣が循環する役に立ったり、眠っている人材や資源を有効に活用できるような、地域の元気づくりができるビジネス、「コミュニティ・ビジネス」こそが必要なのだ>と調査研究活動を続ける細内。アプローチの仕方が異なっていても、二人はこれ以上ないパートナーを得たのである。

こうして立ち上がったネットワークサロンで、竹村はさまざまな試みを始めた。

「どう活かすか、そればかりを考えましたね。ただ、場所があるだけじゃ意味がないでし

よ」

ショールーム、パソコン講習会……まだ、プランはあっても、なかなか形にならなかったころ、新聞の取材を受けた。

当時の記事にはこう書かれている。

――当面の計画の一つが「SOHO for Mothers」。家庭にいる主婦が自宅で働けるようにパソコンの技能を身につけてもらい、同社の仲介で、地元企業や商店のホームページ作成を、発注していくという。

（一九九八年四月二三日付朝日新聞）

技術がつなぐ人々の思い

この記事が掲載されたとき、実際にはまだこのプランは形になっていなかった。構想があるだけだったと言っていいだろう。むしろこの記事がプランの具現化を焚き付けたのだ。

現在のメンバーの一人である品田香苗は言う。

「新聞を見て　＜おもしろそう＞と思ってすぐ電話したんですよ。でも、まだ講習の予定はないと言われて……」

中学生の男の子と小学生の女の子の母である彼女は、ちょうどパソコンに興味をもち、様々な講習会に参加しては、役に立つ知識を知ることがなく失望していたところだったという。

以前からの周囲からの要望と、新聞紙面など、様々な媒体を通してＳＲＮを知った人たちのこうした声を受けて、竹村は決心した。

パソコンの技能は必要に応じて試行錯誤して初めて身につくものである。ボタン一つでなんでも言うことを聞いてもらえるわけもなく、一つひとつ、事細かに指示を与えなければなにもできないのがパソコンである。ということは、パソコンにどんな指示を与えるかを知らなければならないのであり、その指示を与えなければどうなるのかも把握していなければならない。一、二時間のパソコン講習会が、必要性を持たないものにとってなんら得るものがないものであるのは仕方がない。学ぶ側に「何を知るべきなのか」が分からないからであり、それを教えることは「パソコンを扱えるだけの講師」には土台不可能なことだからである。

本当に有能な教師とは、知識の活用の仕方を教えてくれる教師だ。だが、そんな教え手がほとんどいないことは、例えばこんなことを連想してみればわかる。僕たち自身、小、中、高、大とさまざまな「恩師」なる人々に出会う。が、

それほどの指導者に出会った経験が果たしてどれだけあるのか、と。

品田は、第三回の講習に参加し、まったくの初心者からスタートしてホームページを作成するに至っている。この記事で書かれているＳＲＮの姿勢と講習の方向性が、彼女になんらかのインスピレーションを与えたのである。

竹村は言う。

「ほとんどのお母さん方がそうですよ。今まで講習は五回やっているんですが、受講者は二十五、六人います。そのうち今もメンバーとして関わっているのは十人くらいでしょう」

そして、ＳＦＭのメンバーにはある共通項があるという。

「もちろん、初めから多少技能があった人というのは残る可能性が高い。そうでない、まったくの初心者で始めた人でメンバーとして残っている人に共通するのは、＜熱意＞なんです」

母親だからできること

ここで、竹村のはじめの言葉が重要な意味を持つのである。彼は、「初動期が問題」と言った。

「いくらちょっとパソコンの使い方を知ったところで、それは決して仕事にはつながらない。だって、実績を残さないことには、次の仕事がもらえないのに、まずパソコンを覚えたての人に仕事を頼む人なんて誰もいない。技能習得と仕事獲得のチャンスが初めから閉ざされてしまっているんですよ」

だから、彼は、講習会を開いてホームページの作り方をお母さんたちに教えると同時に、その講習を卒業した人のうちの希望者にＳＲＮのスタッフになってもらい、ホームページ作成の仕事を依頼している。

ホームページ作成の講習会にしたのも、仕事を受注しやすかったからにほかならない。

「地域の企業と、外に出にくい主婦の仲介役がしたかった。お母さんたちがこづかい程度でも収入を得て、それが少しでも地域でお金が回ることにつながればいいなと思ったんですよ」

しかし、それでもなお疑問が残る。ホームページ作成を業務にする際、その担い手としてなぜ主婦にターゲットを絞ったのか。竹村自身が認めるように、

「主婦はほんとうに効率が悪いんですよ。夜はダメ、土日もダメ。子供が病気になって、締め切りが目の前に迫っているのに突然キャンセルされることもある」

にもかかわらず、なぜ？この疑問に対して、竹村の答えは明快である。

「地域の中心はお母さんです。家庭の中心であり、子育ての中心であり、世代の中心であり、消費の中心であり、地域ネットワークの中心です。何かやりたいというお母さんたちの潜在的なパワーもあわせて活用することで、おもしろいことができると考えたし、何より、結果的に私たちの仕事にメリットが大きいと考えたんです」

また、ホームページ作成の仕事は、実際にはそれほど多くないのが現状だ。単価も安いという。生活するための収入には遠く及ばない。地元の企業の情報化を必要性を痛感し、支援する意味も込めてホームページ作成の仕事を請け負っている竹村と、子育て真っ最中で、フルタイムに働きに行くことができず、またパートタイマーとして働きに行くことに躊躇するお母さんたち、両者の希望が合致するところでＳＦＭが成り立ったのだ。

ＳＦＭには思いも寄らない効能もあった。メンバーの島田千代子は言う。

「夫や子供たちとの会話も増えたし、こっちが教えてあげることもできてうれしい」

彼女は、三人の子供の母親で、中学生が一人、小学生が二人である。ちょうど夫も仕事絡みでパソコンを始めたところ。もちろん、子供たちは興味津々。少しでも知識と経験があるお母さんが、夕食を終えるや頼れる先生に早変わり。そんな家庭の日常の一コマが目に浮かぶ。

人生とは必然の連続

『アベニュー』という墨田のタウン情報誌がある。ＳＲＮはこのアベニューのホームページを作成しているが、誌面に、

リレー体験記として、毎号SFMのお母さんの談話が掲載されている。

例えば、こんな声がある。

＜母でない「自分」がいると実感できる楽しい時間を過ごしている＞

＜甘さだらけですが、甘さ故の遊びやゆとりも大事にして、より良い仕事へつながるように冒険を続けます＞

＜人生とは必然の連続である（中略）私にとってSRNはその一つ＞

そして、彼女たちが地域の企業や地域情報誌のホームページをつくることにより、墨田という自分たちの暮らすまちのさまざまな魅力が、不特定多数の人々にインターネットを通じて伝わっていく。

「楽しいんです。一生懸命辛い思いをしてがんばっている人には叱られそうですけど、こうして働いていることがとにかく楽しいんです」

と島田は言う。SFMが立ち上がる以前から関わっているメンバーの重鎮的存在である須田順子も言う。

「この仕事は、タイムリミットがわりとすぐなんですよ。締切りまで三、四日しかないことなんてザラ。でも、その刺激がたまらなかったりする。＜やんなくちゃ！＞って必死になったあと、やりとげた達成感がたまらない」

従来のビジネスの観点から評価すれば、自立するだけの収入につながらない、生産性に乏しい、結局は使われているだけではないのか、などという批判があるだろう。だが、同時にまた、これだけは言える。彼女たちのこうした言葉をいったい他のどんな仕事において聞くことができるのだろうか、と。そして、彼女たちの仕事は、自分たちの暮らすまちに深く関わっている。知らずしらずのうちにであるにせよ、そこには、職住近接という言葉では表せない確固たる人と人の、人と地域のつながりがある。

「こうしたビジネスこそがコミュニティの元気づくりを進める『コミュニティビジネス』なんです。私たちは、このようなビジネスの存在意義をもっと知り、育てていかなければならない。行き詰まった日本の新しい可能性ですよ」

細内は語る。

「こうしてみんなに出会い、ホームページを作成するまでになったのは、このネットワークサロンという場があったからだし、今までの自分の住んでいる限られた世界を飛び越えて広がったこのつながりを大切にしていきたい」

インタビューをしたお母さんたち一人ひとりがこうした思いを胸に抱いている。

僕は思わずにはいられなかった。僕自身、仕事をこなしていくうちに、知らずしらずのうちに仕事は仕事、と自分の感情と切り離したレベルで文章に接し始めていることに気づき、がく然とすることがある。人に会う楽しさも、書く喜びも、いつしか辛さに変わっていく。これはおそらく僕だけではないはずだ。よくも悪くも現代社会とは、僕たち一人ひとりを非人間化することによって支えられていることはまぎれない事実なのだから。彼女たちの無邪気なまでの喜びに僕は少しの羨望を覚えざるを得なかった。

ＳＦＭは「も」という働き方なのではないか、と僕は思った。「も」とは、仕事「も」家庭「も」子供「も」自分の生きがい「も」自己実現「も」という意味で、「も」だ。そのようなものであるがゆえ、いわゆる普通の勤めと比べ金銭的な手当てを含め、失うものは多い。だが、同時にそれゆえに、従来型の働き方では得られない価値を内包することができる、という言い方もできるのではあるまいか。

ＳＦＭが示すもの

竹村にはさらなる野心がある。

「お母さんの企業体、とまでは行かないまでも、何か仕事をする集団として育ち、自立していってほしいと思う」

それは、例えば、ＳＲＮの事業部の一つになるということなのか？

「それも一つの選択だと思います。営業や総務はこっちがやればいい。今は完全にＳＲＮが人を出してめんどうをみているような形なので、ＳＦＭが自立し、いっしょにやっていけるような方向ができたら面白いな、と思っています」

竹村の頭の中では、そうして事業として育ったときには、ＳＦＭのメンバーの中から出資してＳＲＮの経営に携わる人が出てこないか、という思いもある。＜仕事もやるお母さん＞から＜自

立して働くお母さん>まで、いろいろな人が様々な働き方をする人の集う場にする、それが竹村の描くＳＦＭの未来像である。

「孤独でやるのはつらいでしょ。こうした場所で一緒になることでやる気も起きるし、教えあって技術は高め合うこともできる。ＳＯＨＯといっても、必ずしも在宅でなければならないなんてことはないはずです」

と、ＳＦＭは結局いかなるものなのか、と問う僕に答えて、竹村は穏やかな口調で言った。そう、いろいろな働き方があっていい。ＳＯＨＯにも、そして僕たちにも。

「ステップアップして生きたい」（島田）

「もっともっとずっと続けていきたい」（品田）

彼女たちのこうした思いが竹村の思いとどのようにつながって形になっていくのか。種は蒔いた。芽も出始めた。育つのはこれからである。果たして、どうなるのか。答えが出るのは、まちがいなくそう遠い話ではない。

インタビューを終え僕がテープを片付けていると、島田がこんなことを言った。

「ここで中央大学の広岡先生の講演を聞いたことがあったんです。私、それまで自分は何もできない。実力もないしってそればかりだったんです。そうしたら、広岡先生が、その<できない>という言葉を口にしては絶対にできるようにはならない。とにかく一歩を踏み出すことが大切、とおっしゃったんです。あれがすごく励みになりました」

こうした言葉をすくい上げていくこと、そして、その輪が地域に広がること。それが竹村たちが取り組もうとしていることなのか。

「仕事が三日、四日続くともう大変よ。終わり次第走って帰って、途中でスーパーで夕飯の買い物をしながら、<今日はお総菜屋で売ってるコロッケでいいや>なんてごまかしちゃったりして。そんな毎日。夫や子供はどう思っているのかわからないけど（笑）」

そんなことを言い合って、彼女たちはまたパソコンに向かっていった。部屋はいつしか、ふたたび明るい声に包まれていた。

▽このページはＣＢＮ（コミュニティ・ビジネス・ネットワーク）のご協力で制作しています。▽問い合わせ先：ＣＢＮすみだ分室（TEL０３－５６２５－３５８２）細内まで。または、ＳＲＮネットワークサロン（TEL０３－５６２４－８１５５）竹村まで。

墨田区の3M運動と伝統産業の世界

中小零細企業による墨田区の「町おこし」

片岡屏風店

屏風、それは古い日本の香りを今に伝えるインテリア製品だ。現代日本の建築スタイルは、とうてい和風とは呼べない。屋外と室内の区切りが障子ぐらいしかなかった時代、風よけとして使われていたのが屏風だ。今となっては、生活必需品ではない屏風の需要は少ない。当然、産業として屏風に携わる人も多くない。

また、屏風の製造は誰にでもすぐにできるような仕事ではない。長い時間をかけて培われた高い技術を駆使する職人の仕事だ。今回、このような屏風産業で働く女性から話を聞く機会を得た。話してくれたのは、墨田区にある株式会社片岡屏風店の安達裕子（あだち　ゆうこ）さん。私たちの取材に対して、大変親切に話してくれた。

実は、私たちがそこを訪れるのは初めてではない。前回の訪問は、二週間前。その日、私たちは大学のゼミで勉強する「町おこし」を直に見るため、墨田区内を歩いた。墨田区には、3M（スリーエム）運動という活動がある。それを見ようと思ったのだ。

〈3M運動ってなに？〉

墨田区周辺は、日本近代工業発祥の地だ。古くから続く企業も多く、押し絵羽子板などの伝統工芸品や、日本ならではの製品を作る会社も多い。小規模の企業がほとんどで、工場だけで区内に七〇〇〇以上もあり、工場が区内産業に占める比率は非常に高い。

昭和五九年、山崎栄次郎区長（当時）の考える「中小零細企業による墨田区の活性化」を具体化したのが3M運動の始まりだ。3M運動とは、「マイスター運動」、「小さな博物館（ミュージアム）運動」、「モデルショップ運動」の頭文字三つのMをとって名付けられた。

①マイスター運動

長年伝わる技術を絶やさず、

さらに発展させていくために高い技術を保持、駆使する人を「墨田マイスター」に認定し、その技を一般に公開してもらうことでアピールしていこうというのがマイスター運動である。

②小さな博物館運動

墨田区の産業史、生活史を、戦前から残る商品、工作機械、文献、資料等「もの」を見せることで知ってもらう。そのために工場、作業場の一部を改装し、開かれているのが小さな博物館（ミュージアム）である。

③モデルショップ運動

「話題の店」づくりを進め、製品の良さをアピールし、話題を呼ぶことで「売り手市場的立場」を確保する。これがモデルショップ運動である。

３Ｍ運動のねらいは、これら三つのＭを通し、産業のイメージアップを図ることにある。

３Ｍ運動について、墨田区商工部産業経済課商工振興係主事、羽片朗子（はかたあきこ）さんにお話を伺った。

前田　小さな博物館やモデルショップを回って、３Ｍ運動には産業振興よりも文化保存の意味合いを強く感じました。区では町おこしとしての３Ｍ運動の意義をどのように位置づけているのですか。

羽片　３Ｍ運動は開始当初から産業のイメージアップを目的としてきました。産業と文化は密接に関わり合っています。もともと、もの作りの町だが、その内容はほとんど知られていなかったため、小さな博物館などを通して町の現状を区内外に公開して、一番の目的である産業のイメージアップにつなげてきたのです。あくまで、区内の中小、零細企業が産業として生き残っていくための支援としてやっているのであって、文化保存の観点は配慮に入れてはいません。

そうした理由からマイスター制度は、後継者育成、技術の継承が最大の目的です。認定の基準には、いい技術をもって新しいもの作りに積極的に取り組んでいるかだけではなく、後継者の育成に積極的であるかが含まれています。そもそも３Ｍ運動は営利目的の活動ではないので、小さな博物館を始めたからすぐに売り上げが伸びる、といった効果はありませんが、実際に産業のイメージアップにはつながっていることは確かです。また、職人からも自分の技術に誇りを持つことが励みになっているという声がよく聞かれます。

前田　墨田区産業振興会で、

３Ｍ運動が提言されたわけですが、その過程で広告代理店からアドバイスを受けることはあったのですか。

羽片　スタートの時点で広告代理店の人がいたのは確かです。墨田区産業振興会議自体は今も続いているもので、その構成メンバーは、学識経験者が二人、区内の中小事業者が七人程度となっています。当時、座長を務めていった井上氏は広告代理店の人でしたが、運動を代理店に依頼したことはありません。

前田　江戸東京博物館を始め、墨田区の文化保存の積極性が感じられますが、３Ｍ運動と生涯学習との相乗効果的な活動は考えていますか。

羽片　マイスターの中には、区民からの要請に応える形で一般向けの講座を開設している人もおられます。マイスターの持つ技術を区内在住者が学びたい気持ちがあれば、それに答えていけるようにしているのです。

玉那覇　区民の３Ｍ運動への認知度はどれくらいですか。

羽片　意識調査の結果、世代に大きく偏りはありますが、三～四割ぐらいの区民には浸透しているようです。（世代による大きな偏りの理由は）職人さんたちが体験学習として区内の学校に出向くことがあり、そうした年代の認知度が上がってきているためです。博物館来訪者を見ても、小中学生が多いようです。特に区外からの来訪者には、東北地方からの修学旅行生が数多く訪れています。

玉那覇　そうした若者向けのアピールの結果、技術の継承者は増えましたか。

羽片　後継者に直結しているとまではいえませんが、３Ｍ運動を始めてから若い人たちからの問い合わせも増えています。その中には手仕事の経験がまったくない人が飛び込みできたケースもありました。職人さんたち自身の（後継者育成の）意識の向上にもつながっているようです。

玉那覇　３Ｍ運動の対象は、伝統工芸に関わる産業が主になっているようですが、その他の産業を取り込んでいこうという動きはありますか。

羽片　区内には優秀な技術を持った名職人が数多くいます。３Ｍ運動の中にはバネ職人のマイスターがいるように、伝統工芸に関わる産業に限定しているわけではありません。マイスターの称号を認定するほかに、職人の奨励の手段として、区では墨田区優秀技能者表彰を行っています。しかし、正直なところ、町づくりの観点からいえばそうした優秀な職人をまだまだ生かしきれていないのです。

前田　今後の3M運動の展開を聞かせてください。

羽片　平成五年よりマイスター共同事業として、それぞれのマイスターが新製品を一つ発表する場を設けようという試みを毎年実施しています。現在第六回まで開催されています。

〈片岡屏風店にて〉

屏風の製造は職人の世界。一昔前なら、そこに女性の姿があること自体珍しかった。実際にその職人の世界に身を置く安達さんが、何を考え働いているのか知りたいと思った。

墨田区役所から隅田川の支流大横川にかかる吾妻橋を渡り向島方面へ。大通りから少し入ったところに片岡屏風店はある。三階建てのビルだ。一階二階が片岡屏風店のオフィスとなっている。一階は主にモデルルームで、商品の数々が並べられている。また、小さな博物館の活動として、ショーケースが置かれ、屏風に関する資料などが紹介されている。二階は工場だ。現在、男性四人女性四人で営業している。仕事の内容は、杉などを使った木の枠組みに和紙を貼り、絵柄を付けていく。枠組みは業者へ発注している。年末から節句の時期にかけて特に忙しい。

私たちが訪れたのは平日のお昼前で、玄関を入ると、安達さんは机に向かい仕事中であった。今回、墨田マイスターでもある社長の片岡恭一（かたおかきょういち）さんにも話を伺うことができた。

安達さんは、美術学校を卒業後、ヨーロッパの美術学校でも学んだ。今の片岡屏風店は三つめの職場。最初の仕事は食品関係の会社でのパッケージデザインだった。そこは社員研修に力を注いでいて、多くの経験を積むことができたという。二番目の仕事は、建築機器のデザイン。

「どっちの会社でも自分の得るべきものがあったし、あまり

片岡屏風店／店内

嫌な思いもすることはなかった。そういう意味ではラッキーだった」と、今でも考えている。以前のデザインの仕事は「例えば、こんな都市を作りたい、そのためにはこんな家を。こんな家を造るためにはあんな建築機器を……。と、自分たちが何かを作る上で、より大きな世界を創造していく、そんな仕事だった」と感じていた。言い換えると、「未来に向かって何かを作っていく」仕事だった。

しかし、ご自身の都合で二番目の職場を辞めると、その未来に向かって何かを、という気持ちがあまり持てなくなった。かわりに感じたのは、「自分で何かを作りたい」という気持ち。それまでの仕事は商品のモデルを考えるだけで、実際に製造するわけではなかった。安達さんの曾祖母は長年日本刺繍をしていた。そのおかげで、慣れ親しんだとまではいかないが、屏風はそれほど縁遠いものではなかった。所長の片岡さんに頼み込み、屏風張りの仕事から始めた。現在は屏風に絵柄をデザインすることが主な仕事である。古いスタイルにとらわれすぎない、そのデザインは印象的だ。

「今の仕事はすごく楽しい」

そう話す安達さんの言葉に嘘がないことは、その表情からもひしひしと伝わってくる。

会社を引っ張る片岡さんは、三代目の社長にあたる。安達さん曰く「仕事＝レジャー」の人。職人といったら、頑固で無口で恐い人。そんな想像をしがちだが、そういう印象はまるでない。安達さんと話す社長の姿からも、この会社の雰囲気の良さが伝わってくる。片岡さんは一般の人々への屏風作りの指導もしており、区内の生涯学習センターで教室を開いていたこともある。

片岡屏風店では、お客の注文次第で希望する絵柄の屏風を作ってくれる。それは、長く伝わってきた屏風の未来を、格式にとらわれることなく創造しているようである。「仕事は仕事だよ」と言いながらも、楽しんで屏風を作ることができる方がいい、と言い切る片岡さんは、屏風づくりを単なる仕事とは考えていないようだ。親子代々続いての三代目とはいえ、嫌々就いた仕事ではない。先代の社長、つまり片岡さんのお父さんからは、「自分のやりたい事をやれ」と言われていたそうだ。こういう事からもわかるように、片岡さんの屏風作りに対する姿勢は強い思い入れを感じさせる。

安達さんからも同じような印象を受けた。学生時代に学んだのは、西洋の美術やデザ

インに関することだった。日本美術の世界に触れることは新鮮で、古い時代に作られた屏風の工夫一つ一つを見ることがすごく楽しいという。「極端な話、屏風はのりと紙さえあれ作ばれる。年をとってからも一人でできるでしょ」仕事を辞めても、屏風なら趣味として続けられる。現在仕事として関わっている世界と退職後も趣味として付き合っていきたいと考える人はなかなかいないのではないだろうか。

今回、片岡さんと安達さんだけに話を聞いたが、他の社員の皆さんも同じ考えなのではないかと思う。屏風作りを単なる仕事ととらえず、屏風作りの世界にそれぞれ何らかの思い入れを持っているのではないだろうか。

『男性社会で働く女性の話を聞く』という今回のテーマは随分と的外れだったようだ。そこには、男性も女性もなく屏風作りに励み、楽しむ片岡屏風店の人々の姿があった。古い時代の伝統を多く残す下町で笑顔の絶えないその職場は、私たちの目に非常に魅力的に映った。実は私たちは、就職を来年に控えた大学四年生だ。安達さんのような気持ちで臨める仕事に巡り会えればと切に思う。

（まえだしょうへい　たまなはちえ　学生）

調理実習は楽しいよ

審議会のメンバーが高等学校の家庭科の授業を視察に。

きょうは調理実習の時間で、先生がうさぎリンゴのつくりかたを教えていた。V字型の切り込みを入れて、皮をむく。模範演技をしてみせて、生徒たちに自分でやってみるように促した。それから先生は審議会のメンバーに向かって「どうぞ、先生方もお試しください」、とにっこり。

いろんなリンゴができた。牙みたいに分厚い耳ができたり、片耳うさぎができたり。巨大な羽根のセミリンゴになったのもあった。

実習は自分で体を動かす。だから楽しい。

この日いちばんはしゃいでいたのは審議会のメンバーだった。日ごろ体を動かすことの少ない人たちだから、なおのことだった。

「やっぱり調理実習は大事ですなあ」と、いつも大所高所にたった原則論を展開するM教授。

そのM教授が手にしているうさぎリンゴは、どうみてもゴキブリだった。

一人ひとりの仕事が輝くように

福祉作業所「藍工房」

野田 陽子

私たちも働きたい！

東京都世田谷区にある「藍工房」は、福祉関連の仕事をしている人々、あるいは福祉の勉強をしている人々にとって「知る人ぞ知る」福祉作業所である。

主催者（所長）は竹ノ内睦子さん。以前竹ノ内さん自身が、ある福祉の勉強会に出席した折の事が開所のきっかけとなった。そこでは「障害者と就業」というテーマで討論がなされており、障害を持つ人達が「働きたい気持ちと体力はあるのに、働かせてくれる所がない」と話すのを聞くうち、「そんな社会はおかしい。それなら自分たちで働く場所を作りましょう」と言って藍染の工房を始めてしまったのである。

最初は六畳一間を借用し、制作・販売・生活すべてをその中で行うという工房ではあったものの、その後徐々に周囲の理解を得て、有志の人々より寄付が寄せられたり、区や都からもある程度の援助が出るまでにこぎつけた。現在は、法人化へ向けて努力を続けているところである。

藍工房にはグループホームという住み込みの「メンバーさん」（藍工房では「障害者」でも「生徒」でもなくこう呼んでいる）用のアパートがあり、そこから通ってくる「メンバーさん」や、自宅から通ってくる「メンバーさん」でいつも賑わっている。また、ここでは――竹ノ内さんのポリシーでもあるのだが――精

神障害者・身体障害者・知的障害者を区別せず受け入れている。しかも「区別しない」のは、障害者に限ったことではない。健常者も同様に区別していないのである。

藍工房という空間

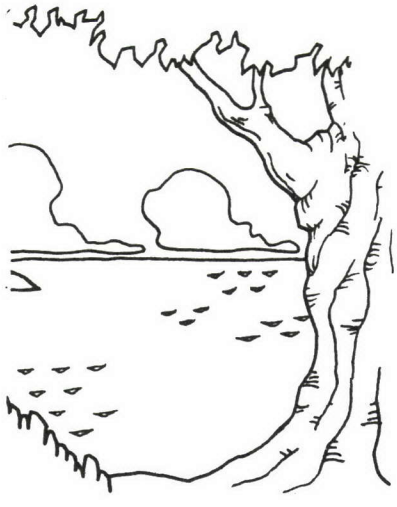
現在藍工房では、制作活動としての藍染の他に、草木染、刺し子、組み紐、陶芸、織物等が行われており、生活面においては、生け花、書道、茶道、調理、絵画、詩の朗読、美術散歩等を取り入れている。先生は、主婦や会社をリタイアした人といった、比較的時間の自由になる市民ボランティア（教えられる何かを持っていることが前提であるが）や、その道の現役指導者によるボランティアである。そして、藍工房の仕事を手伝いながら、これらのことを学びたいという健常者も「区別」せずに受け入れている。このように、ちょっとしたカルチャースクールのようでさえあるのだが、このアイデアにより障害を持つ人達もごく当たり前に健常者と接することができる仕組みになっている。

私見であるが、これはむしろ健常な市民、特に障害者と接したことのない人達にとって、その接し方の研修の場所と機会を提供してくれているようにも見える。実際、障害者と接したことのない人達から投げかけられる心ない言葉や態度、あるいは過剰すぎる心配や世話焼きに、障害を持つ人達やスタッフが傷つけられていることが多いと聞く。

意識を変えなくてはいけないのはむしろ一般の市民の方であろう。こうした意味で、藍工房は一般社会に向けて発信（問題提起）をし、同時に受信（解答を各々が見つけられるよう、場所と機会を提供して受け入れてくれる）をしている福祉作業所といえないだろうか。

アメリカにも施設が

藍工房はアメリカにも施設を持っている。そこは障害をもった人達にとって、おそらくは数少ない海外旅行、及び海外生活を実現する場所となっている。渡航費用には、自分で制作した作品が売れる度に自分名義の講座に貯金していったお金、藍カフェ（藍工



房がオープンしたレストラン）でアルバイトして得たお金、外部一般企業等でアルバイトして得たお金など、各々自ら生み出したお金が当てられている。

このシステムにより、藍工房での日々の作業にも、お金を貯める目標と楽しみを見出すことが可能になっているのである。そして海外生活により、親元から離れて自立した生活を送る体験ができたり、広い敷地内の自然の中でのびのび過ごすことができる、といったメリットがある。

また、アメリカでは日本の伝統工芸品ともいえる藍染や刺し子の作品は特に好評で、作品が売れればまたお金が「メンバーさん」の貯金に入っていくというメリットもある。

アメリカ藍工房でもボランティアとして内部の仕事を手伝う条件で、健常者である日本からの留学生の宿を提供したり、一緒に旅行や生活をする短期滞在の健常者も受け入れている。市民ボランティアに関しては、周知の通りアメリカ市民はかなり進んだ意識を持っており、周辺住民もいろんな面で協力してくれているようである。日頃の協力に感謝して、例えばお返しにお茶会を開き招待するなど、藍工房は国際文化交流の場さえも提供しているのである。

「ボランティアというのは『やってあげている』という気持ちでは続かないし、それではお互いに不幸よ」というのが竹ノ内さんの口癖である。私自身、ボランティアで藍カフェ内の貸しギャラリーの営業をしたときには、国籍を問わずさまざまな芸術家に会うことができ本当にわくわくしたし、自分自身にとっても人脈や知識を広げるのに役立った。

創造する力を育てる

また、こんなこともあった。写真家になる夢を持った写真好きの友人は、ギャラリーで個展を開くことになった「メンバーさん」の絵画のポストカードを作るために無償でかり出されたが、竹ノ内さんの「この写真があなたにとってプロとして最初の仕事（ポストカードは販売する商品でもあったため）になるわけね」という一言で、このボランティアの仕事が自分自身にとっても大切なものとなってしまった。前述のように、リタイアしたもののまだまだ教えたい技術、伝えたいことがあるのに働く場所がないというような人達にとっても生き生きと過ごせる仕事場所となっているに違いない。

一方、藍工房では、作品を制作するということが障害を

もつ人達にとって単なる収入を得る手段に終わってほしくないという考え方から、その独創性、芸術性も重要視している。そのため「メンバーさん」の中には、障害者であることを伏せて出した作品（織物）が、展覧会で評価され受賞している人もいれば、その作品に固定客がついている人もいる。また、ニューヨークの「ＭＯＭＡ美術館」に絵画作品を送って館長に見てもらったりしている人もいる。

このように障害者本人達をも含めて、市民が自己実現を行うための力を培う場所としても立派に機能しているのである。

自立・自発・参加の意義

会社での仕事からは報酬を受けることによって金銭的な満足は得られるが、それが同時に自分の本当にやりたいことであるとは限らない。お金のためにと思って、忍耐を強いられることもあろう。

つまり、金銭的な満足が常に精神的な満足を伴うとは限らない。人間としての健康な生活を送るためには金銭的な満足と精神的な満足の両方が必要なのであるから、何らかの形で――例えば、右に述べたような自発的な活動をすることによって――「自分のために」精神的な満足を取り込んであげるようにすれば、一個人の中でこの両方のバランスが取れていくように思う。

誰にも強制されるわけでなく、嫌々やるわけでもない自発的活動、しかも単なる自分だけの趣味の活動と違うところは、相手があるところであり、社会参加をしているところである。

今回のような福祉作業所の障害者と健常者の例に限らず、障害者であるから、とか、また、健常者であるから、といった固定観念を捨て、双方が自発的に自己実現のために努力し、お互いに楽しめるさまざまな市民活動及び市民活動の場がこれからも増えていくべきであると考える。そのための具体的な方策のひとつをこの「藍工房」が示している、と言ったらそれは少々言いすぎであろうか。

さまざまな人々が心地よく共存できる社会こそが本当の社会である。共存するためにお互いを思いやるからこそ、自分の視点だけでは気付かなかった、不便だったり奇妙だったりする社会公共のことに目が向くようになるのである。

市民の意識を、行政の手の回らないところを補ったり、改善や改善要求をしていくところまで高めることもまた、市民活動の重要な役割であろう。

（のだようこ）

広岡守穂の
常住坐臥 4

1

『婦人之友』という雑誌がある。手作り服のつくりかた、台所の工夫、家計簿のつけかたから、家庭、教育、文化、政治、社会問題まで、幅広く扱っている。落ちついたつくりの誌面で、読者を受け身の消費者としてとらえていないのが一般の女性誌とちがうところである。生活全般を自分たち自身の力で組織していこうという理念を感じる。

そういうところが好きで、若いときから夫婦で愛読していた。

2

『婦人之友』は羽仁もと子、吉一夫妻がはじめた、古い歴史をもつ雑誌である。二人は報知新聞社の同僚で、結婚して退社後、１９０３年に『家庭之友』を創刊した。創刊号は32ページで、その記事のすべてを羽仁もと子が一人で書いた。吉一もジャーナリストとして多くの文章を書いているが、こと『家庭之友』に関しては妻が書き、夫が営業するという役割分担での二人三脚だったようである。『家庭之友』は１９０８年に改題されて、いまの『婦人之友』になった。

羽仁もと子は日本最初の女性ジャーナリストである。

もと子は１８７３年に青森県八戸町（いまの八戸市）に生まれた。地元の小学校を卒業後、１８８９年、高等女

学校入学のため上京した。もと子は16歳、大日本帝国憲法が発布された年であった。

高等女学校を卒業したもと子は、明治女学校に進学した。このとき校長の巖本善治に可愛がられたことが、のちにジャーナリストとして出発する原点になった。巖本善治は『女学雑誌』の主筆でもあった。もと子は巖本の用事で、島崎藤村だの、加藤弘之だの、跡見花蹊だの、ミセス・ラージだの、大勢の著名人に使いをさせられた。

もと子が出会った著名人の中で、いちばん印象的だったのは島崎藤村だった。間近でみる藤村は、まるで「お店の番頭さん」のようで、あのロマンチックな詩からおよそかけ離れた雰囲気だったのである。

3

明治女学校を卒業したもと子は、いったんは小学校教師になったが、やがて1897年、24歳のとき、報知新聞社に入社した。それもはじめは校正係だった。

校正係として編集部の片隅で働きはじめたとき、印刷工場の職工たちは「動物園に女が来た」とうわさした。編集局のとなりがすぐ工場になっていて、その間が金網を張った窓で仕切られていたのである。

当時の報知新聞は、一面に上流婦人のエピソードや日常生活を紹介する「夫人の素顔」という読み物欄があって、これがたいへん人気だった。もと子は、その欄の校正をしながら、どうかして自分もこういうものを書きたいと思っていた。あるときもと子は、学校時代の先生から聞いていた谷干城子爵夫人のことを思いだし、紹介をもらって訪ねて行った。そしてそのことを記事にまとめて担当に渡した。勝手な行動だったが、なんと、もと子の記事は採用された。こうして日本初の女性ジャーナリストが誕生したのである。

4

『家庭之友』の創刊号が発行されたのは長女説子が誕生した翌日だった。ということは、出産も迫った毎日、もと子は原稿の最終のつめに追われてい

たということである。驚くばかりのエネルギーである。

はじめての出産育児は、女性にとって一大事業である。すべてが未知の経験ばかりで、不安や戸惑いがつきない。そのことが雑誌の方向を決定づけた。

もと子は、母として主婦として、家庭生活にかかわるあらゆる問題について、専門知識や経験を持つ人々を訪問して熱心に教えを受けた。そして自分が学んだことを、読者がうまく活用できるようなかたちの記事にした。ひとつのことに興味を持つと、それをいろんな角度からとらえた。たとえば子どもの洋服が良いと思っても、もと子はただ洋服が良いから着なさいというだけの記事を書かなかった。子供服の裁ち方や縫い方を記事にし、着方を記事にした。洗濯法を記事にし、子どもに洋服を着せた経験を記事にし、費用がいくらかかるかを記事にした。そればかりでなく講習会を開いた。

5

もと子のジャーナリストとしての活動をささえていたのは、西洋的な合理主義だった。その合理的な思考が家計簿を生んだ。忙しい新家庭の家計はいつも赤字になる。羽仁夫妻の家庭もそうだった。いつもやりくりに苦心していたときに、ふと家計簿を思いついた。家計簿の記事を掲載した号は大評判になった。当時の書店は気に入った本があると自分で立て看板を出していた。神田の町を通ると、家計簿といっしょにもと子の名前が大書されていた。

もうひとつ、もと子の活動の根底にあったのが、キリスト教の信仰である。その信仰によって、もと子は社会問題に取り組んだ。家庭の実務のことばかりでなく、世の中の風教のことや家庭の精神的方面のことをどんどん扱った。たとえば夫の飲酒を止めた妻の話しを載せた。その号は評判になり、重版に重版を重ねた。教育問題、生活問題、貧富の問題、そういった社会問題は、すなわち家庭の問題だと、もと子は考えていた。

大正時代の日本では「社会改造」ということがしきりに唱えられた。もと子が青春時代をおくった日本は、工業

化と都市化が進行し、日々、貧富の格差がはげしくなっていた。そして労働運動がおこり、社会事業がはじまった。一方では欧米の文化が流入し、生活様式の洋化がはじまった。大正デモクラシーの旗印のもとに、「社会改造」がうたわれた。

一人ひとりの考え方が変わらなければ社会は変わらない。その意味で、もと子は、社会改造は家庭からはじまると考えた。生活合理化と社会改造を、彼女はひとつながりのものとしてとらえた。

6

明治女学校でもと子に漢文を教えた星野天知は、後年、回想録の中でもと子のことを書いている。それによると、彼女はたいへん活発な性格で、姉御肌のところがあり下級生にたいへん人望があった。そして彼女は学校の授業に飽きたらぬ思いを抱いていた。

１９２１年、羽仁もと子、吉一夫妻は、自由学園を創立した。それは文部省令によらない女子の中等学校だった。雑誌から学校へ、まっすぐに伸びていったこころざしの大きさと、それを実現した行動力は、もと子の学校時代からつちかわれていたのである。

もちろん夫婦の協力ということも忘れてはならないだろう。もと子が書き、吉一が経営した。素晴らしいコンビだったのだと思う。

7

『婦人之友』の読者の会が「友の会」である。その会員がお金を出し合って建設した友の家が全国各地にある。わたしは小学校3年生のとき、金沢市の友の家に遊びに行ったことがある。40年以上も前のことだからはっきりしないが、たしかサンドイッチかおにぎりをつくって食べたような記憶がある。ぽかぽかとあたたかい日だった。

その金沢友の会が、このほど70周年を迎えた。

新連載

地方政治を考える

実効性のある女性政策とは

広岡 立美

6月15日に「男女共同参画社会基本法」が、衆議院本会議で全会一致で可決成立しました。わたしたち女性にとって本当に嬉しいことです。この法律の趣旨や内容が多くの人に理解されることを願わずにはいられません。

この法律で自治体は男女共同参画社会づくりに取り組む責務を負うことになりました。ですから自治体自身が、男女共同参画社会づくりに向けて率先して範を示さなければなりません。東京都や埼玉県は男女共同参画条例をつくることを検討しています。それも意義あることですが、実効性ある女性施策をきめこまかにすすめるとすれば以下の点を避けてとおることはできないと思います。

(1) 管理職に女性の思い切った起用を

自治体がまず取り組まなければならないのは、管理職に女性をどしどし登用することです。石川県の場合、課長相当職以上の職員のうち女性の割合は昨年度4・5%でした。平成9年が4・1%、平成8年が3・6%、平成7年が4・4%でした。ここ数年ほとんど変わっていません。(教育委員会と公安委員会をのぞいた知事部局)。石川県議会議員にしめる女性の比率も4%そこそこですが、それとどっこいどっこいというのでは困ります。せめて県議会の3倍くらいにしてほしいと思います。

こういう問題では、よく、女性が育っていないという声が聞こえてきます。それならば外部から起用するという手段もあります。千葉県浦安市や秋田県横手市の国際交流課長はいずれも民間から起用された女性です。ポストによっては、広く全国に公募するという手法も

悪くありません。佐賀県女性センターの前館長は公募で決まりました。中央官庁から出向してこられる職員もぜひ女性をお願いしたいものです。石川県でもかつて女性を副知事に迎えたことがあります。

(2) 自治体幹部職員の研修をどしどし行う

女性施策を担当している女性職員が、あるときこんなことを言っていました。「役所の中では、女性政策そのものが《嫁》の立場に置かれています」。

これでは女性の社会参画をすすめることはできません。男女共同参画の精神を共有できない男性といっしょに議論したり仕事をしたりするのは、女性にとって本当に骨の折れるたいへんなことです。

いま男女共同参画社会づくりに何より必要なのは、行政であれ企業であれ、組織の中枢にいて意志決定をしている人たちの理解です。比較的年齢層の高い男性の意識が変わらないと、女性の社会参画はなかなかすすみません。ですから自治体の幹部職員の研修を徹底することが重要です。

女性施策というと、よく審議会等における女性委員の比率を高めることが引き合いに出されます。たしかにそれはシンボリックな意味をもつでしょう。しかし、実際的な効果の面からいえば、課長相当職以上に女性をどんどん起用するとか、幹部職員の研修をくりかえし実施するほうがずっと有効です。

(3) 女性行動計画の達成度をあきらかにする

最近は女性行動計画（アクションプラン）をもつ自治体がふえてきました。都道府県はすべて、すでに行動計画をつくっています。では行動計画は実際にどの程度達成されているのでしょうか。問題はそこです。立派な目標をかかげることはそれ自体大事ですが、いくら目標は立派でも達成されなければ意味がありません。

女性施策については、本当のところどれくらいの効果を上げているのか、施策の実効性をはかることが大切です。審議会の女性比率は分かりやすい指標ですが、審議会の女性比率が高まったからといって、その県の女性の所得がめざましく上がるわけではありません。

意識啓発ばかりでも不十分です。女性の就業支援や仕事おこしの支援、働く女性のための保育の充実、セクハラ防止などの方が実効性があるでしょうが、その直接的な効果は限られています。ここが女性施策の難しいところです。

そこで個々の施策の実効性についてきちんと評価分析することが大事になります。個々の施策は女性行動計画に包摂されているでしょうから、結局のところ、女性行動計画について、実際にどれくらい達成されたかを評価分析することが大事になります。

とはいえ、いざ評価分析を実行しようとすると、どういう方法で評価分析するか、けっして簡単ではないことが分かります。今日の課題は、そこをしっかり研究することです。いまのところこのことに取り組んでいる自治体は、神奈川県などの他ほとんどありません。できるだけ早く庁内でワーキンググループをたちあげるべきです。

（4）自治体に何ができるか

女性施策の実効性を高める。口で言うのはた易いですが、では自治体に何ができるのかというと、実際に自治体ができることは非常にかぎられています。たとえば女性の社会参画をすすめるには、民間企業における女性の登用がすすまなければなりません。しかしそれは労働省の管轄であって、自治体にできることはせいぜい「お願い」でしかありません。

では自治体は実効性の高い施策を打ち出すことはで

県議会の議場

きないのでしょうか？その点わたしは次のように考えています。

地方自治体は、よりよい地域社会づくりをめざして、みずから率先垂範して企業や県民を方向づける責任があります。たとえば自然環境にやさしい地域社会をつくり、女性の社会参画をうながし、市民活動がいろんな分野で活発になるようにする。そういうことのために自治体は何ができるかということです。

この問題は、県庁と民間業者とのつき合い方のルールというかたちで考えることができます。県がＮＰＯに委託すればＮＰＯは元気になります。同様に、県が環境問題に取り組んでいる企業に優先的に事業を委託すれば、環境問題に対する県内の企業の姿勢は変わってきます。おなじように、障害者の雇用や福祉にきちんと取り組んでいる企業に委託したり、女性の雇用・昇進に積極的で育児休業や介護休業制度を整備している企業に委託する。環境や福祉や女性問題に真剣に取り組んでいる企業がだんだん優先されるようになれば、ほかの企業もみんなこれらの問題に取り組むようになるでしょう。

一般に自治体が民間業者に事業委託したり物品を購入したりするときのルールは、どうなっているでしょうか。価格が安いかどうか、そして地元業者かどうかという２点が、ふつう業者を選ぶときの基準になっています。わたしはそれに加えて、障害者を積極的に雇用しているかどうか、女性が働きやすい環境づくりに努力しているかどうか、環境問題に取り組んでいるかどうか、などといった点を基準に盛り込むようにするべきだと思います。

すでに述べたように、地方自治体には、よりよい地域社会づくりをめざして、みずから率先垂範して企業や県民を方向づける責任があります。この場合、自治体には企業一般の行動を規制する権限はありません。たしかにそれは国の役目でしょう。けれども自治体は自治体と業者とのつきあいかたに新しいルールを設定することはできるはずです。企業や県民の行動を方向づける実効性の高い手段として、業者委託や物品購入のルールを位置づけることが大事なのではないでしょうか。

（ひろおかたつみ）

「新・男性読本」考

杉原志保

新・男性読本

K県の女性政策課が男性に向けてつくった『新・男性読本』。男のアタリマエ・チェックからはじまって「女たちのホンネを聞いてみよう」というページに至っては、かなり笑える。

女の言い分、として『男はすぐ保護者顔して女のやることに干渉したり、カッコつけて女を守りたがるけれど、守りたいのは、本当は自分のメンツじゃないの？守ってほしいって誰が言った？』『ミスをすれば「だから女は…」親切にすれば「やっぱり女だな」仕事の評価は「女のわりには」どうしてそんなに「女」の部分ばかりに目が行くの？ヘンじゃない？』結婚したら仕事と家庭と育児とをどうしようかと、女の私ばかりが悩んでいる。私は自分の人生に「主人」なんて要らない。どさくさ紛れに「可愛い嫁さん」をやらされたくないぞ！　と色々なことが書かれていて思わず読みながらウンウンと頷いてしまいう。

この冊子は、バリバリのスーツを着た正義感ムンムンの男性が「男のアタリマエは女のアタリマエじゃないのだ！」と豪語するところから始まっている。「さて、男性諸君！君は女性をひどく怒らせてしまったという経験はないかな？それに怒らせてしまった理由が見当つかないという覚えはないか？なぜそんなことが起きるのかというと、それがボクらが思っているアタリマエというやつを自然と女性におしつけているからだ。それゆえに一番近くにいる女性を傷つけたり不愉快にさせたり、くやしい思いをさせたりしているのだ。当

の男性自身はそれにほとんど気がついていない…ということがよくある。」…そうそう、そうなんです。どんなにフェニミストな男性(?)でも、時々ふとホンネがでている。「結局はね。ま、こんなもんでしょう」と思いつつ、半ばガッカリしながら「でも他の自分大王よりはマシ」なんて思いながら、その差一センチくらいで軍配があがっている。

みんな自覚していない、なんてことはもちろん言わない。自覚していない人が多い、ということもそうそう言えない。むしろ自覚なんかしたくないといった方がホンネなんじゃない?自分を直視し続けること、そして相手を認め続けることは、ものすごいエネルギーを使う。努力なくしてはできないこと。

とにもかくにも、これを読んだ男性のホンネを是非とも聞いてみたいものだ。どれだけの人が「分かるよ」の後に「でもさあ…」と続けるか。そこら辺まで調査してみるのもオモシロイ。

でも、正義感ムンムンで意識的な顔をして訴えているこのスーツを着た男性も、よく考えたらちょっと胡散臭い…と思うのは私だけ?

行政のジレンマ 行政のホンネ

「行政責任のジレンマ状況」ならぬ「女性行政のジレンマ状況」。某自治体の職員Aは今日も一人悩む。「強制力をもった政策を推進することができない…」女性政策はこれまでその裏付けとなる法が存在しないかたちですすめられてきた。世論や知事の政策的判断によって大きく左右されるこの女性行政を、どうにかして安定したものとしてすすめていきたい。そう頭を抱えるA。

「でも男女共同参画社会基本法成立おめでとうございます、じゃないですか」。この基本法の成立にむけて、都道府県で条例をつくろうという動きが平行してあった。基本法づくりに直接関わる者が条例をつくろう会に出向いては、その進行状況と内容をリファーし、それにもとづいて地方議員・自治体職員・市民のそれぞれが条例づくりに関する知恵を出し合っていた。自分の地域の女性行政がどれだけ遅れているかに頭ズカーンと殴られて帰っていく女性は、

そこで蓄えたエネルギーを行政へのアクションに変えていった。そういった静かでいてパワフルな動きがこの基本法の成立の背後にあった。法ができてどれだけのことができるか、漠然とした法ではあるが、裏付けができたことは女性にとって希望でもあるのだ。

「えーおめでとう?…って言っていいんだか（笑い）」。Aは苦笑していた。彼は悩んでいた。法もできた。条例をつくることも可能になった。しかし、である。「基本法は…内容、漠然としているしねぇ」。女性行政を具体的なかたちで推進していく者にとって、この基本法の漠然さは強制力という面から見て「ガン」になる。

だったら条例の中にもう少し具体的な内容を盛り込んでいくことはできないだろうか。「もっと（地域に）入り込んでいくかたちで、ってことね…?」と苦笑する。公としての自治体が地域という私の領域に入り込んでいくことには、やはりナーバスにならざるをえない。「だから宣言条例にでも…」。基本法が漠然としているから困っているというのに宣言条例にしたら「二重の漠然」になってしまわないの？　具体的にどうやっていいか考えあぐねている、ということをそれは意味しているの？

社会に対して「これ、やっていただけませんか?」といったお願いしかできない中で、一体どうやって女性行政を推進していったらいいのだろう…と、家にも満足に帰れず今日も夜な夜なひたすらお仕事。「お家で男女共同参画？ったくねぇ、それどころじゃないんだわ…」。これもすなわち「女性行政ジレンマ状況」？

（すぎはらしほ）

政治のことば

・**女性政策課**　女性の社会参画を進める部署。たいていの自治体にあるが、名称はいろいろだ。男女共同参画推進室、男女共生課、女性青少年課等など。

・**男女共同参画社会基本法**　1999年6月15日に成立した。基本法と名付けられた16番目の法律。女性の社会参画を進めるための、行政の責任、企業の責任、市民の責任などがうたわれている。

・**宣言条例**　条例の性格は千差万別。おおまかな方向性と精神をうたった宣言的な性格の強い条例のこと。

水底に響きあいたる宇治川の滔々として暮れ色をなす

木村　郁子

京都市の南を流れる宇治川は、琵琶湖を源にした瀬田川の下流である。その豊かな水流は、木津川、桂川と合流した後、淀川と名を変えて大阪湾に注ぎ込む。世界文化遺産の周辺は、『源氏物語』「浮舟」の巻で、ヒロインが入水しようとした場所としても有名で、王朝ロマンに繋がる旧跡も多い。

趣のある風情の中を散策しながら、胸奥に共鳴して聞こえてきたのは、青春の名残との惜別だったかもしれない。或いは、ことさら意識した無常観だったような気もする。

半世紀を過ぎた人生を振り返り、私の心境の軌跡と現在の平穏な暮らしを思うとき、何と幸運だったかと冷や汗が出る。勿論、満足の尺度は人それぞれで、私の喜びなど、あまりにも細(さざ)やかかもしれないけれど……

この充実感は、ＰＴＡ活動に参加して出会えた人たちが運んでくれたものである。当然、わが子二人の存在があったからであり、その原点は夫との結婚以外にない。

折しも、友人の夫君が急逝された。中学生で父を亡くした私が、常に心の隅で覚悟してきた事態だ。今の気持ちを油断無く維持していかねば……と、あらためて気を引き締めている。

木村 郁子（きむら いくこ）
岐阜県大垣市在住。一九四七年岐阜県生まれ。一九九五年、歌集『偽善者の糸』出版。

U子三話

大野木潤子

一輪車に乗れた

U子ちゃんは地域の小学校内にある養護学級の一年生。入学と同時に放課後児童クラブにも入所してきた。やや言語障害があり、入所時はこちらからの話しかけに、おうむ返しの言葉が返ってくるだけだった。

「U子ちゃん、お帰りなさい」

「ウン、お帰りなさい」

という風に。

ただ、お友達の名前はよく覚えた。すてきな男の子の名前はまっ先に覚えた。

「A君」「H郎君」「T彦君」

というように、にっこり笑いながら話しかける。しかし友だちはできにくかった。U子自身が友だちを意識しすぎと感じた程だ。健常児との生活の中で物おじせず仲間入りできる遊びとして、U子は一輪車に乗ることにも挑戦しだした。一輪車はスケートのときの手すりみがきと同じように、壁伝いに移動する練習から始める。最初は両手でやっと壁につかまっていたのが片手だけで動けるようになると、壁を背にして、思い切って手を放してすべり出す。転ぶ。ころぶ……

この段階で誰もが嫌になり、止めていく子が多い。多い。友達の手前、転ぶのがなんとも格好悪い。自尊心が強い子程止めてしまうケースが多い。U子ちゃんは、5年生の男の子に憧れた。音楽に合わせて、さっそうと一輪車で演技する5年生の男の子達を見て「一緒に遊びたい、一輪車に乗れたら」と一心に壁伝いを始めた。そして1ケ月、……2ケ月がすぎた頃、壁から2m程離して敷いたジャンボマットを目がけて、勢いをつけて突進した。スーッと一輪車は壁から離れ、U子ちゃんは身体ごとマットに飛びこんだ。自分自身びっくりしたように信じられないような顔をして、にこっと笑いかけてきた。「やったね、出来たよ」と肩を叩きながら胸がいっぱいになった。

それからは、毎日、児童館へ帰るなり、「一輪車、いちりんしゃ」と手を引きにくる。

側で見守っていてやる事がU子ちゃんを一番安心させるらしい。

壁際で一輪車にのって準備中のU子ちゃんから3m、5m距離を延ばしながら立って飛びこんでくるU子ちゃんを、身体ごと受け止めた。一人でのれる距離が長くなると皆の尊敬を一身に集める。同じ頃始めた一年生の中で誰よりも早く乗れるようになったのだから。

片手を持ってやると、どれだけでも乗り続けられる。直径10mの円周上を、一輪車にのったU子ちゃんと手をつないで何周も何周も歩いた。

ぐるぐる同じ場所を手をつないで廻るメリーゴーランドもした。

夕方、お迎えに見えたお父さんは「一輪車乗りの乙女になりましたね」と顔をくしゃくしゃにして喜ばれた。言葉の遅れをどんなに気にかけていらしたのだろう。

そして、地域の小学校の新一年生歓迎会でU子ちゃんは一輪車の模範演技を披露する。

うさぎの年賀状作り

今日は児童館で子どもたちは年賀状作りに取組んでいる。紙を切って貼って、或は綿糸いとで兎を形作っている。

廊下へ出るとU子ちゃんが手招きしている。「これ、これ」と云ってこまのひもを差し出した。一緒にこま廻しをしたいらしい。

「U子ちゃん、こまはもう少し後にして、これでうさぎ描こうか」と床の上へ座りこみ

「こっちの耳は私が描くよ。もうひとつの耳はU子ちゃんが描いて」と言って紐の端を渡すと長い耳を紐で描いた。

「よーし、それじゃ、顔描いてよ。このお耳の続きにさ」

「うんうん」と言いながら、紐をいじくっていて顔のりんかくが出来る。

「よーし、それじゃ今描いた兎の顔、この紙に描いて」と葉書大の紙を差し出すと、タコ糸で元気のいいうさぎが出来上がった。大きな赤い目や鼻まで描いている。

「うわあー、うまいわあー。よく出来たね。じゃ今度はこの黄色い糊で絵のとおりタコ糸を貼っていくよ」と話しかけると、そのとおり片耳を私の手を手繰りながら貼っていった。

ひとつ貼るとすぐ立ち上って、どこかへ行きそうになるので

「ほら、もうひとつの耳もしてよ」と座らせる。すぐ作業にかかるがU子ちゃんの目はすぐ版画から離れてしまう。

指示された事は出来るが、続きが見えないらしい。その繰り返しだったが顔の形が出来、ひげがついてようやく仕上がった。

虹色のスタンプを使って試し刷りをする。

「いい感じに仕上がった、よくがんばったね」と拍手する。

年賀状に刷り上げて、お父さん、お母さん宛のおたよりにする。

元旦に娘から届いた年賀状をどんな顔で眺められるだろうか。

児童館の庭で

U子は虫が大好きである。夏草だらけの児童館の庭で蚊に刺され、足をぷくぷくに腫らし、ボリボリ掻きながら捕虫網を振り回している。

無心なのが虫に分かるのか、U子ちゃんの網には虫がよく入ること。

同じに網を振り回している男の子には敬遠されるトンボやチョウ、バッタがU子ちゃんのたもにはどんどん入る。素手でも捕まえる。どんな虫でも手のひらにのせ、じっと見て慈しんでいる。牛乳パックの中に捕らえてきた虫を入れ、大事に家へ持ち帰る。

お迎えにいらしたお父さんが、「家の中も外もあっちにもこっちにも虫だらけなのに、まだ持って帰るんですか」と苦笑されるが、U子ちゃんが心許す大事な友だちは虫、優しげにいとしげに手のひらの虫に話しかけている。

「歯医者に行ってきたよ。ギーッしたよ」「そう、痛かった？」こっくりと頷く。ゆっくりながら会話のピンポンもできるようになってきた。自分の世界を切り開いていく子どもの生きる力に目を細めている。（おおのぎじゅんこ　石川県母親クラブ連絡協議会会長）

娘の言葉

堀川美紀子

子供ってすごく純粋で、私の心のようだと思うときがある。私が心で思っていることを、いきなり話しかけてくることがある。違う場所にいても同じ歌を歌っていることさえある。

下の娘と、寝る前に読む本を「山のかいしゃ」にしようと話しているときだった。上の娘が、「今日はこれにしたよ。」と、手にしていたのは、その「山のかいしゃ」だった。いつもふたりの意見が合わないので、1冊づつ選んで一緒に読んであげている。でもこのときばかりは、不思議な一致にこの1冊を仲良く読んだ。主人公のほげたさんが、いつものように電車に乗って会社に行こうとすると、なぜか山に着いてしまい、ちようどいいとばかりにそこで仕事をしてしまうという愉快な話だが、いつもの何倍も愉快に感じた出来事だった。

こんなこともあった。私は夫と揉めたことでとてもイライラしていた。そんなときはどうしたっていちばん身近にいる娘たちに当たってしまう。ご飯を食べている娘たちに、「テレビなんか観ていないで早く食べなさい」とつい、いつも叱らないようなことで叱ってしまった。すまなそうな顔をした娘たちは、「ママ、これすごくおいしいね」と、気を使って、私の気持ちを和らげようとしているのがわかった。私は、叱ったのは自分がイライラしているからだと気がついた。「ママはパパのことがとても好きだけど、さっきはいやだなと思ってとてもイライラしていたの。それで怒ってごめんね」。わたしがそう言うと上の娘が、「そうだね。生きていくってたいへんなんだね。学校でも嫌な友達がいるけど、がまんして仲良くすることもあるよ」。娘に諭されて、なんだかおかしくなって機嫌が直ってしまった。まだ8歳なのに、その言葉は妙に大人びていて説得力があった。

この子はこの子なりに学校という社会で苦労しているのだろう。優等生タイプ

の子なので、お友達との関係がいつも心配の種だった。慕って来る子は多いけれど、言うことがまじめすぎて、嫌がられることがあったり、嫌いな子でもがまんして、その子がかわいそうだからと言いなりになってしまうこともよくあった。このことでは娘とよく話していたし、「いろんな子がいるけど、がんばろうね。」と、いつも話していた。だから娘の言葉はとても胸にしみた。こう言うときはもう8歳、ちゃんと話せばわかってくれるし、答えもくれる。そのことが嬉しかった。私が励ましてきたことで、娘は自分なりに問題を乗り越えてきて、それが私への優しい言葉となったのだろう。

私の機嫌が悪いときというのは、だいたい夫とのことだったりするが、そんなとき娘たちとゲームセンターへ行って遊んでくることがある。（こんなくせをつけてはいけないのかもしれないが）でも上の娘はうすうす気づいているようだ。「ママ、笑顔が大事だよ」と、鼻歌なんか歌いながら、とびっきりの笑顔で言った。下の娘は一生懸命に、ドーナッツを口いっぱいにほおばっている（余談だが、この子の食べっぷりは、一生懸命という言葉がぴったりくる）。でも実は、聞いていないようで聞いているこの娘がくせものなのだ。「ママとけっこんしてあげる」後でそう言って、私を大笑いさせてくれた。このふたりの娘のおかげで、私はいつも元気でいられる。どんなときでも笑顔でがんばろうと思うことができる。

（ほりかわ みきこ）

私のボランティア

野崎　貴子

私が住んでいる藤野町は、神奈川県の最北端に位置し、東は東京都八王子市に、西は山梨県上野原町に挟まれた、面積約六十五平方キロメートルの町である。

都心から中央線で一時間半という距離のせいか、ベッドタウンとして新しい住宅が建つ反面、まわりを山に囲まれ、また水源地ということもあって大きな開発は出来ず、鉄道と国道二十号線が通っている中心地以外は坂道ばかりの町である。また、交通の便が悪いので、車なしで生活するのは、何かと不便な点が多い。

町の人口は約一万人で、そのうち十六～十七パーセントが高齢者という高齢化が進んだ町で、元気な高齢者は昔からの農業に従事しているが、虚弱な人は外出もままならず、狭い範囲の中で生活している。

このような状況の中で、わたしが直接かかわっているボランティア活動が二つある。

一つは、自宅に引きこもりがちの高齢者や虚弱老人、軽い痴呆老人等に対して、町の社会福祉協議会が実施している、お年寄りの気楽な集まりの時のボランティアである。

この会の特徴は、出てくることの難しい高齢者を中央に呼び出すのではなく、私達の方から地域に出向いていき、その地域の公民館などでお茶飲みやレクリエーションを行ない半日過ごしてもらうことである。

現在、開催地域は町内に五ヶ所あり、月に一～二回行なわれ、昼食をはさんで四～五時間を過ごしている。ここでは、手芸や工芸の作品作り等やゲーム、歌、軽体操、カラオケ、料理の他、暖かい日には近所に散歩に出掛けたりと、高齢者が希望することを大事にした気楽な会である。

そこでのボランティアは、お茶の準備や片付け、ゲーム等を考えたり、一所に遊んだりと、皆に楽しくすごしてもらうよう進行することである。

回を重ねるにつれ、楽しみにしてくれる人も増え、

毎回十五～二十人位の参加があり、それに対応しているボランティアは一～二名、そして一回おきに社教職員が訪れるという、ほとんどボランティアと高齢者を中心にした会といえる。

また、ボランティアとしてかかわってきて成果といえることは、現在、七～八十歳の高齢者は大変な時代を過ごしてきたせいか、遊ぶということがあまりなく、今になって自由な時間がたくさんあっても、どう過ごしていいかわからず、一日テレビをみているという人も多い。このような生活は痴呆につながり、生きがいも持ちにくい。そこで、生活にはりをもたせ、生きがいづくりのお手伝としてこのような会ができていった。メンバーは皆知っている人ばかりとはいえ、最初はゲーム等をすると遠慮がちであったものが、慣れるにつれてのびのびとしてきて、心から笑い、楽しんでくれるようになったのである。

次に、もう一つのボランティア活動は、障害者に対しての訓練時のお手伝である。

ここ藤野町は、障害者にとっては高齢者以上に厳しい環境で、坂道の多さに車椅子で出歩くことなど不可能に近い。以前、障害者についての講演会があったとき、講師の方に伺うと、電動車イスでも登れない坂が数多く存在した。そのため、より一層障害者に対してボランティア活動や行政の事業を発展させる必要があるが、その行政の事業の一つである、障害者のための機能回復訓練が月二回実施されている。

脳卒中や脳梗塞などにより、半身マヒや言語障害になった人を対象に、理学療法士や作業療法士の先生が他市より訪れ、半日かけて訓練するのであるが、一人一人にみあう指導をするので、ボランティア対象者一人～三人に一人の割合でつき、その訓練のお手伝をするのである。

こちらの対象者は、高齢者ばかりでなく、中には五十歳代で罹病した人もいて、各人病状も回復状況も異なるので、ボランティアの援助は重要である。

対象者は毎回十名位参加し、ボランティアも三～四名の他に、看護婦、保健婦、ヘルパーなどがかかわっている。

さて、ボランティアなど市民が自発的に活動することの意義としては、次のことが考えられる。

(1) 市民の参加意識が高く、責任感も強い。
(2) 時間的な融通がきく。
(3) 要望に応じて、きめ細かく対応できる。
(4) そして何よりも、どうしても規則や条例に拘束されてしまう行政より自由に動ける。

このように市民が積極的に参加することで、行政や対象者としては、どんなメリットが考えられるであろうか。

まず行政側としては、

(1) ボランティアとしていろいろな人をまきこむことで、社会的に隔離されがちな高齢者や障害者のコミュニケーションを図ることができる。
(2) ボランティアの得意とすることを有効に利用することができる。
(3) 行政と違った見方ができ、場合によっては提案してもらえる等があげられる。

次に対象者としては、

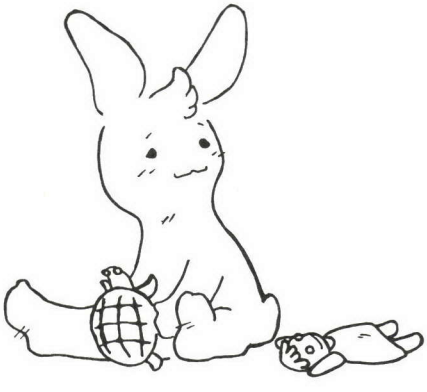
(1) 行政の手が届かないところまで、きめの細かな対応が可能。
(2) 対象者同士やボランティアと接することで、気の合う人や同じ環境の人と知りあえる。
(3) 自分より若い人に対して、場合によっては指導的立場にもなれる。
(4) 行政の不足部分を補ってもらえる場合もある、ということが考えられる。

但し、ここで最も注意しなければならないことは、いつの場合であっても対象者のプライバシーは守るということである。融通をきかせやすい立場だけに、踏み込んではいけないラインの見きわめが大切になっていくのである。と、同時に、守秘義務も課せられる。

何はともあれ、現在ボランティアの中心となっているのが家庭の主婦である。しかし、もっと若い人達や男性にも参加してもらえたらと思う。

そして、自分達が高齢者になったとき、障害者になったとき、人にどうして欲しいか、社会にどうして欲しいかということを常に考えながら、自然体でボランティア活動にかかわっていくことは、自分たちの将来の為にも、充実した福祉の基盤づくりの為にも、その意義は大きいといえるのである。

（のざき たかこ）



図書館から見えた 現代「親」事情

加藤 喜代子

わが子の通う図書館が閑散としていることには気づいていた。また、それが、この学校に限られた事ではなく、全国的な現象であるということも承知していたつもりではあった。中にはカギがかけられ閉館したままのところさえあるということも。

ほとんどの小中学校の学校図書館には専任の図書館書司が置かれておらず、教師が片手間に図書館係をさせられており手がまわらないのが現状だ。その状態のままで放置されて久しく時間が経った。

子供たちが利用しないのか、利用したくない理由がなにかあるのか、もちろん、子供の視点にたった議論も必要ではある。だが、私は、偶然わが子の通う学校の図書館の書庫の整理、分類、調査に携わる機会をもち、「活字離れ」などと分かりきったお題目では解決しない問題がはびこっていることを痛感した。

文部省の学習指導要領は、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成」を、と謳っている。にも拘らず、知識を吸収し、知恵をはぐくむ場として欠かすことのできない図書館の書籍・資料の整備、充実、図書館司書の配置に全く無関心・無頓着であるようなのだ。

実際に動いてみて

「文部省が何かしてくれるまで待っていてはわが子は義務教育過程を終えてしまう。何とかしなくては」

という思いが強かった。しかし、以前に、読み聞かせのベテランの友人が放課後に読み聞かせの会をやらせてほしいと申し出た際も、あっさりと学校側から拒否されたことがあった。

学校側は、父母が学校の内部へ入り込むのを嫌っているのは明らかであった。

その年は少々事情が好転していた。前年が創立十周年にあたっており、そのために積み立てられた費用の一部を書籍購入にあて「しいの木文庫」として学校へ寄贈するなどして図書館に母親たちがかかわり始めたこともあった。また、「PTA活動と積極的に手を結び、学校を運用しよう」とい

う考えの教頭が転任してきた事も大きな力になったのかもしれない。有志で図書館の整理、分類、調査を申し出たところ、思いがけずあっさりと許可が下りた。

私事ながら、私は、ちょうど、この年の三月に自宅の改築のために高等学校の非常勤講師を退職した。四月から、この機会にと前々から計画していた通信教育課程を受講し、図書館学を学習し始めていた。七月には日野市にあるキャンパスでのスクーリングに参加し、全国から集まって来た人人（現職の教師、一般公務員、主婦など。さまざまな立場ではあるが図書館学を学ぶためにやってきた人人）と現場の状況や、「A高校は○○に取組んで、すごい効果が上がっている」といった、具体的で参考になる生の情報も得ることができた。

この体験が、実際に図書館の整理にかかわるときに非常に役に立った。

九月中の三日間を使い、次のような手順で、作業を進めた。

(1) ジャンルごとの分類や利用者の使い勝手などおかまいなしに、ただ単に購入順に並べられていた本を、いったんすべて書庫から出し、掃除し、日本十進分類法により配架し直した。

(2) 低学年の児童にも分類がわかりやすいように、日本の各地の小学校で行なわれている日本十進法の分類を色で表したラベルを書架や書籍に貼った。

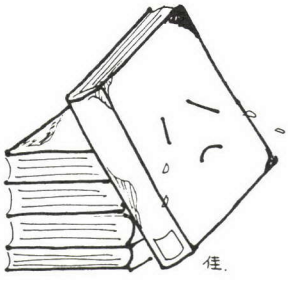
(3) 損傷しているものは補修し、修復不可能であったり、利用価値の乏しいと思われる書籍（二〇年も前の年鑑など）は廃棄した。なぜなら、こうした書籍も一冊として数えられ、新たに必要と思われる書籍を購入する際のさまたげとなるからである。

(4) 子どもたちの使い勝手を考え、机、書架の位置を変更した。

(5) 分類別に書名と冊数を確認した。

(6) 学校側へ報告書を提出。今後、出来るかぎりの努力を、と要請した。

この活動の意義と問題点を考えてみると、学校側に対して積極的に働きかける事によって、過去にぶつかった壁（たとえば、学校側が読み聞かせの会の開催を拒否したこと）を崩して学校の管理職員、教師、事務職員、父母、児童の



図書館への関心を喚起することが出来た。

それは校内のみならず、たまたま市内で始められた　熊本市の学校図書館に司書をという署名運動に、多くの人が書名をよせるなど、校外活動へも関心が広がるきっかけも生んだ。

これは、人々が「学校図書館の抱える問題」という公共的な事柄に関心をよせ、自ら世論を形成しようとした事になるわけで、大きな前進だと思う。

しかし、こうした前進もある一方で、書名による請願は、市民の強い思いが後押ししたにもにもかかわらず、予算不足という事で、あっさりと却下されてしまった。

継続と広がり

結論的には、このような運動は、一地方都市で単発的に行なうのではなく、全国的に連帯して大きな流れを作りだし、国会でたとえば「学校図書館法」といった、子どもたちが良書に触れる環境整備のための法案の制定について検討するようにしなくてはつらい。ＰＴＡを主体とする活動、運動は長続きさせるのが困難であるからである（ＰＴＡ役員のほとんどが一年で交代するし、子供が卒業したらかかわれなくなってしまう）。

話は戻るが、こうした外への広がりの一方で学校側へも影響力を少しは及ぼすことが出来たと自負している。

当時、文部省が学校図書館の蔵書充実のため、学校側から申請があれば予算を交付してくれることになった。しかし、手続きが煩雑であるために申請しない学校が多かった中で、わが校では進んで申請手続きをおこなったのである。

その一方で、本の修理や読み聞かせの活動を行ないたいという申し入れは、管理上問題があるとして拒否された。たしかに難しい面もあるのだろうが、もっと学校は地域社会のエンパワーメントに寄与すべきではないだろうかと思えてならない。

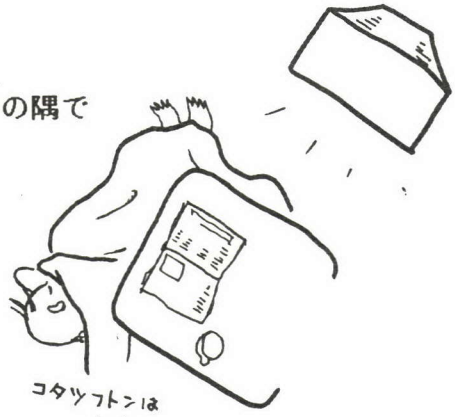
日本人は主体性に欠けると言われる。しかし、以上述べてきたような市民の自発的活動によって、人々の公共的関心を喚起し、議論を呼び起こし、問題点を改善していくならば、主体性を持った市民によって真の民主主義が根付いていくと考える。

民主主義というと、少々おごことのようだが、よりよい環境は自分たちでつくる。それは、たとえば図書館の充実を図ることからも始められる、それを実感した日々を伝えたかったのだ。（かとう　きよこ）

寝りの風景

一日二十四時間
そのうち三分の一から四分の一の時間を寝て過ごす
どんなに忙しくても　どんなに楽しくても
必ず寝なくてはならないから
結構色々な場所で眠っている
小さい頃　眠るのがもったいなかった
今　眠りに落ちる瞬間が　至福の時だったりする

コタツの隅で



旅行中
駅のガード下で

遊びの途中
秘密基地の中で

守ってくれる人の腕の中で

友人や恋人と
"おはよう"って。

自宅の布団以外の場所で過ごすとき
これまで何処で　誰と過ごしてきただろう
これから何処で　誰と過ごすのだろう

北里 香代 さん

からのおたより

920 0972
石川県 金沢市 杉浦町
「家族とくらしの会」御中

今年も、アーティストキャンプ in ASOが開催されました。熊本県阿蘇郡小国町では、全国あるいは海外から彫刻家を招いて10日間で作品つくりをするという催しがあります。地元の公民館で合宿生活をしながら、ほとんど初対面の作家達がいわゆる「同じ釜の飯を食う」のです。5年目の今年は「たたく」という行為をテーマに始まりました。木、土、鉄、石という素材と違って、素人の私の中では作品として見るまではどうもピンとこないままだったようです。

そもそもこのキャンプの仕掛け人は、熊本市在住の吉井氏を中心にした5人の作家達なのです。「どうして毎年小国町なの?」と聞くと、「小国は違うんだよな。よその町とは…」という答えが返ってくる。日本全国あるいは海外まで足を延ばす彼らが、1年に1回の合宿生活を楽しみに来るのです。毎年新しいメンバーとの出合い、地元住民との交流もその中の大きな役割のひとつでしょう。しいて言えば、物を作りあげるという過程の中で、普段あまり経験することのない不便さ、不自由さを楽しむためにやって来るのかもしれません。昼間は近くの住民が様子を伺いに、ポツポツと集まります。子どもが学校帰りにのぞいたり、夜ごと繰り広げられるレクチャー有りの酒宴を楽しみにせっせと通う私みたいな者もいます。

2〜3日するとすぐそばの草だらけのゲートボール場がきれいになり、近所のおばあちゃんたちがやって来てゲートボールを指南。相手は作家のひとりである山岡さんです。毎回テーマの中に人との関りを求める彼は、自ら草を刈りおばあちゃん達を"ナンパ"してきたのです。「僕の作家活動は、趣味でも仕事でもないと思っている。自

分に与えられた使命なんだ。」とかっこいい事言いながら、創作意欲が人に向けられて行くのになんとなく親しみを感じてしまいます。村祭りの時にしか使わないというりっぱな土俵の上で、若い衆に胸を借りた伊藤さんも又おもしろいという一言で現していいか疑問ですが。

さて、ｇｒｏｕｐＥＮのメンバーである2人の主婦が家族を従えて、好奇心いっぱいに取材にやって来ました。年4回発行している会報作りのために作家たちにインタビューするのですが、「芸術家は変なことを聞いたら怒りませんか？」などと控えめだった態度もすぐにほぐれて、たて続けに質問を浴びせます。感心したり驚いたり、素朴な疑問をことばに現していきます。結局彼女らもまたアーティストたちのファンになったのです。初日から毎日遊びにきていた”たけしくん”小学校5年生は、手伝いをしり昼寝をしたり一緒に御飯を食べたりで、りっぱなスタッフの仲間入りでした。最終日うるうるした目で「ぼくさみしい」と言われた時はつい貰い泣き。人の心の扉を〝たたいた〟のは、たけしくんの方かもしれません。

スタッフは「芸術を地方から発信する場があっていいんじゃないか？」という気持ちをひとつにして、又来年もこの小さな町にやってくるのでしょう。住民が彼らを芸術家として受け入れたかどうかの疑問は残るにしても、残された作品を見てきっと不思議に思うことでしょう。これからはツーリズムの時代と言われる昨今、自然と芸術と人との一体感もまたこの町で育まれるのだと思います。

北里　香代

ｇｒｏｕｐＥＮについては家族とくらし4号参照

芸術とは働くことと見つけたり

〈編集後記〉

◇やっと9号をお届けします。予告では5月20日発行のはずでしたが、大事件発生で2カ月近くも遅れてしまいました。すみません。大事件って？　ご存じの方もいらっしゃると思いますが、この4月に広岡立美が石川県議会議員になってしまったのです。いままで政治に無関係だったのに、ほんとうに想像もできない展開でした。

◇議員になり、さっそく政策スタッフを公募しました。女性の仕事起こしを応援するステップアップショップも開店し、はりきっています。雑誌も続けます。もちろん守穂との二人三脚もこれまで通りです。（たつみ）

◇立美と別居しました。昨年の12月から、立美は金沢市で母親と同居し、わたしは東京で下の子ども二人と同居しています。お互いに金沢と東京を行ったり来たりしているのはこれまでと同じですが、顔を見る時間が少なくなったので淋しいです。でも元気を出すため、男女共同参画別居と呼んでいます。（もりほ）

◇次男が幼稚園に入り、やっと一人の時間が持てるようになりました。初の取材でしたが、充実したときを持てました。（かおる）

◇荒木経惟写真展「センチメンタルな写真、人生」へ。意外や意外、中年女性の多いこと多いこと。アラーキー写真を熱心に見つめる彼女たちの深層心理とは。・・・・ふかーい。（しほ）

◇全国婦人会館協議会が文部省の委嘱を受けて実施した「女性関連施設に関する総合調査〈学習・研修〉事業に関する調査」の調査結果がまとめられました。全国の女性センター等で開催されている〈学習・研修〉事業について詳しく調査したもので、調査結果は報告書と事例集の2冊になっています。お問い合わせは左記にどうぞ。

全国婦人会館協議会
東京都千代田区六番町15番地　主婦会館プラザエフ内
03・3265・8116

◎次号は10月20日発行予定です。
◎定期購読のお申し込みは左記のところまで。
〒179-0081
東京都練馬区北町6-4-10
「家族とくらし」広岡立美
電話03-3931-9278
バックナンバーは3号、4号、5号、6号、7号、8号があります。
（定価600円送料込み）

女性の自分育てを応援する雑誌

表紙・塩野雅子
マーク・けらえいこ　題字・弓削明子
カット・池田将子、大塚佳代、広岡史子

600円

家族とくらし　9号
1999年7月15日発行
発行所　家族とくらしの会
発行人　広岡立美
〒920-0972 石川県金沢市杉浦町1-1